熊取町埋蔵文化財調査報告第25集

中家住宅発掘調査報告Ⅱ

― 中家住宅94― 1 区 ―

平成８年３月

熊取町教育委員会

はしがき

熊取町内では、現在のところ38ヶ所の埋蔵文化財の包蔵地（遺跡）が確認されております。埋蔵文化財は、この地において旧石器の時代より築き上げてきた先人達の文化に実際に触れることのできる文化財の一つです。この貴い文化財を保護することは郷土を愛する心につながります。

さて、今回報告する中家住宅とは、熊取町大字五門にある重要文化財中家住宅とその周辺一帯の遺跡であります。中家は大久保にある降井家と共に泉南地方の旧家であり、中世には地侍であり近世は豪農として栄えた家であります。故にこの地が熊取町の中心となった場所であり、今後も発掘調査が進むにつれて徐々に熊取町の歴史が解明されていくでしょうが、その中にあってこの中家を中心とした地域の発掘調査は、熊取町ひいては泉南地域の文化解明のために重要なものとなるでしょう。

しかし近年、関西国際空港が開港されるなど、急速な土地開発が進み埋蔵文化財発掘調査件数は年々増加する一方であります。この様な状況の中で、本町教育委員会は失われてゆく遺跡の記録・保存に努めてまいりました。

本書は平成６年度に実施した旧郵便局跡地における郷土資料館新築工事および、重要文化財中家住宅消火設備工事に伴う発掘成果を概要報告ではありますが、たとえわずかでも文化財保護に貢献できればと願い発刊するものであります。

文末となりましたが現地での発掘調査にあたってご理解とご協力頂きました方々、ならびに関係者各位に対して心から感謝の意を表します。

平成８年３月

熊取町教育委員会

教育長　七　里　　弘

例　　言

1．本書は、熊取町教育委員会が歴史文化施設整備事業における郷土資料館新築工事及び重要文化財中家住宅母屋の防火施設事業における消火設備工事に伴って平成６年度に実施した、中家住宅94―１区の発掘調査概要報告書である。

2．調査は、熊取町教育委員会町史編さん室前川 淳を担当者として実施した。

3．４級基準点測量業務、航空測量及び図化作業は株式会社かんこうに委託した。

4．本書における標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また、方位は地図以外については磁北を示すこととした。

5．土色は、小山 正忠・竹原 秀雄編『新版標準土色帖』第10版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。

6．本書作成にあたっては、調査に協力頂いた調査員・調査補助員の方々の努力に負うところが多大である。明記して感謝を申し上げます。

桑原 良治、阪口 雅美、関井 澄子、武田 徹、水葉 希、南谷 克実、山本 恵子、吉田 知秋

また、遺物の観察について次の方々から協力を頂いた。ご芳名を記して感謝申し上げます。

近藤 康司氏、嶋谷 和彦氏、土山 健史氏（以上堺市埋蔵文化財センター職員）

7．本書に掲載の遺物写真は、財団法人大阪府文化財調査研究センターの立花 正治氏、久禮 孝志氏に委託した。

8．本書の執筆・編集は、前川 淳の協力のもと永井 仁が行った。

目　　次

はしがき

例　　言

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

　　第１節　地理的環境 …… 1

　　第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　調査に至る経過 …… 2

　　第１節　既往の調査 …… 2

　　第２節　調査の契機と経過 …… 4

第３章　調査の概要 …… 5

　　第１節　基本層序 …… 5

　　第２節　遺　　構 …… 5

　　第３節　遺　　物 …… 14

第４章　まとめ …… 17

挿　図　目　次

第１図　熊取町の位置 …… 1
第２図　中家住宅周辺の遺跡 …… 3
第３図　93—１、94—１区調査位置図 …… 4
第４図　Ａ—１区遺構断面図 …… 7
第５図　ＳＵ01断面図 …… 8
第６図　Ａ—２区遺構断面図 …… 8
第７図　ＳＸ21平面図、断面図 …… 9
第８図　ＳＸ22平面図、断面図 …… 10
第９図　Ａ—１区平面図、断面図 …… 11
第10図　Ａ—２区平面図、断面図 …… 12
第11図　Ｂ区調査位置図、土層柱状図 …… 13
第12図　ＳＵ02断面図 …… 14
第13図　出土遺物 …… 15
第14図　出土遺物 …… 16
第15図　中家住宅旧平面図 …… 20

図　版　目　次

図版第１　Ａ－１区全景
図版第２　Ａ－２区全景
図版第３　土層断面
図版第４　遺　　構
図版第５　遺　　構
図版第６　出土遺物
図版第７　出土遺物
図版第８　出土遺物
図版第９　出土遺物
図版第10　出土遺物

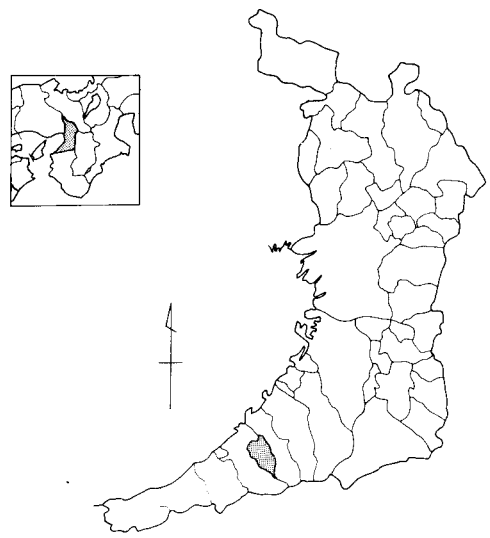
第1章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央に位置し、貝塚市、泉佐野市の両市に囲まれた町である。

町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉形を呈している。町域の総面積は約17平方kmを有する（第１図)。地形については町南部において泉南地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占めており、北部においては和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また、北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

地形による面積比を見てみると山地が41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され山地丘陵部が町域総面積の約３分の２を占めている。



第１図．熊取町の位置

町域に水源をもつ河川は大別して見出川、雨山川、大井出川の３水系が存在している。３河川とも町南部の山間部を水源として南部から北部へ向って流下し、泉佐野市を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部が他市域を流れることに加えて、本町域が瀬戸内式気候区の東端に位置している為に年間降水量が少量であることから、古くから町域一帯に多く灌漑施設が存在している。特に現在においても町内随所に多くの灌漑用の溜め池を目にすることができる。

今回の調査地点である中家住宅は国道170号線に面し、地形的には現在の住吉川の左岸域に形成された低位段丘上に立地している。この段丘面は熊取町役場前面（「東円寺」推定地）付近が最も高く、北、西及び南方向に向って緩やかな傾斜をもつ段丘面を形成している。

第２節　歴史的環境

本町内の遺跡数は38ケ所を数えるが、遺跡の範囲・性格等は未だ不明確なものが多く存在しているのが現状である。

中家住宅は昭和39年に重要文化財に指定（母屋１棟・附表門・唐門各１棟）された泉南地方の旧家である中家の居宅であった。母屋と唐門は17世紀の建築と言われ表門も18世紀のものと推定されている。昭和34年には保存のための大幅な解体修理を行ったが、その際母屋の基礎部分にも若干の調査が行われ、その礎石に関しては全く変動の痕跡がないことがわかっている[1]。

周辺の遺跡（第２図）を見てみると、中家住宅（２）と共に中近世を考える上で重要なものに降井家屋敷跡（25）がある。中世後期より熊取荘及び近隣の村落を支配していた豪族層である降井家の屋敷地周辺の遺跡で、所在は大字大久保にあり中家住宅の西約500ｍに位置する。建造物として江戸時代初期の特色を有する書院は、昭和27年に「降井家書院」として重要文化財に指定されている。昭和60年度に

行われた調査[2]では敷地を区画していたと推定される溝を検出している。出土遺物は唐津、伊万里、備前などの16世紀を中心とした陶磁器を検出している。

また、大井出川の対岸に位置する東円寺跡（６）がある。現在のところ東西900ｍ、南北400ｍを有する町内最大の遺跡範囲となっている。遺跡名となっている「東円寺」（廃寺）は近辺の発掘調査により出土した軒丸瓦や文献から平安時代末期頃に建立された寺院であると推定される。当寺院は、付近の水田に伝えられている「トヨジ」「東永寺」「大門」「堂ノ後」等の小字名から段丘面の高位置にあたる現在の熊取町役場の正面域に所在していたと考えられるが、中心部の調査が行われていないために伽藍配置などの正確な把握は未だ為されていない。しかし、近年の度重なる発掘調査により寺院跡としての当遺跡の様相より、それ以前の８世紀代に比定される掘立柱建物群や遺物が検出されている。また、建立以後に成立した13世紀から14世紀にかけての中世集落の様相が徐々にではあるが明らかになりつつある[3]。

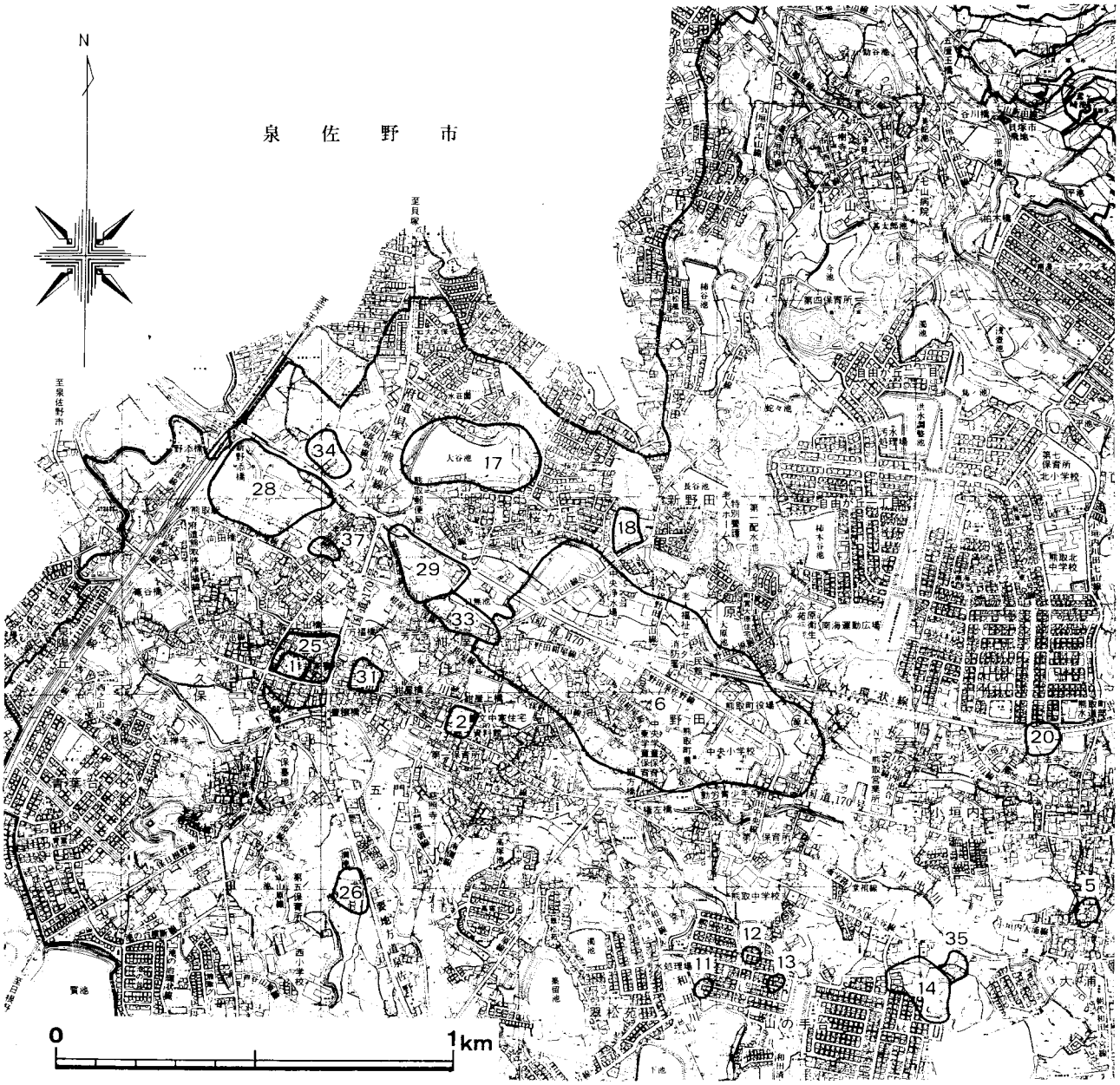
同じ住吉川流域の低位段丘上に立地している、大久保Ｂ遺跡（28）、大久保Ｅ遺跡（37）は弥生時代後期から終末期頃を継続時期とする遺跡である。大久保E遺跡で終末期頃に比定される遺物が多量に投棄された溝が検出されており[4]、今後の周辺地域の調査で当該期の集落跡が発見される可能性が非常に高いと言える。

第２章　調査に至る経過

第１節　既往の調査（93－１区）

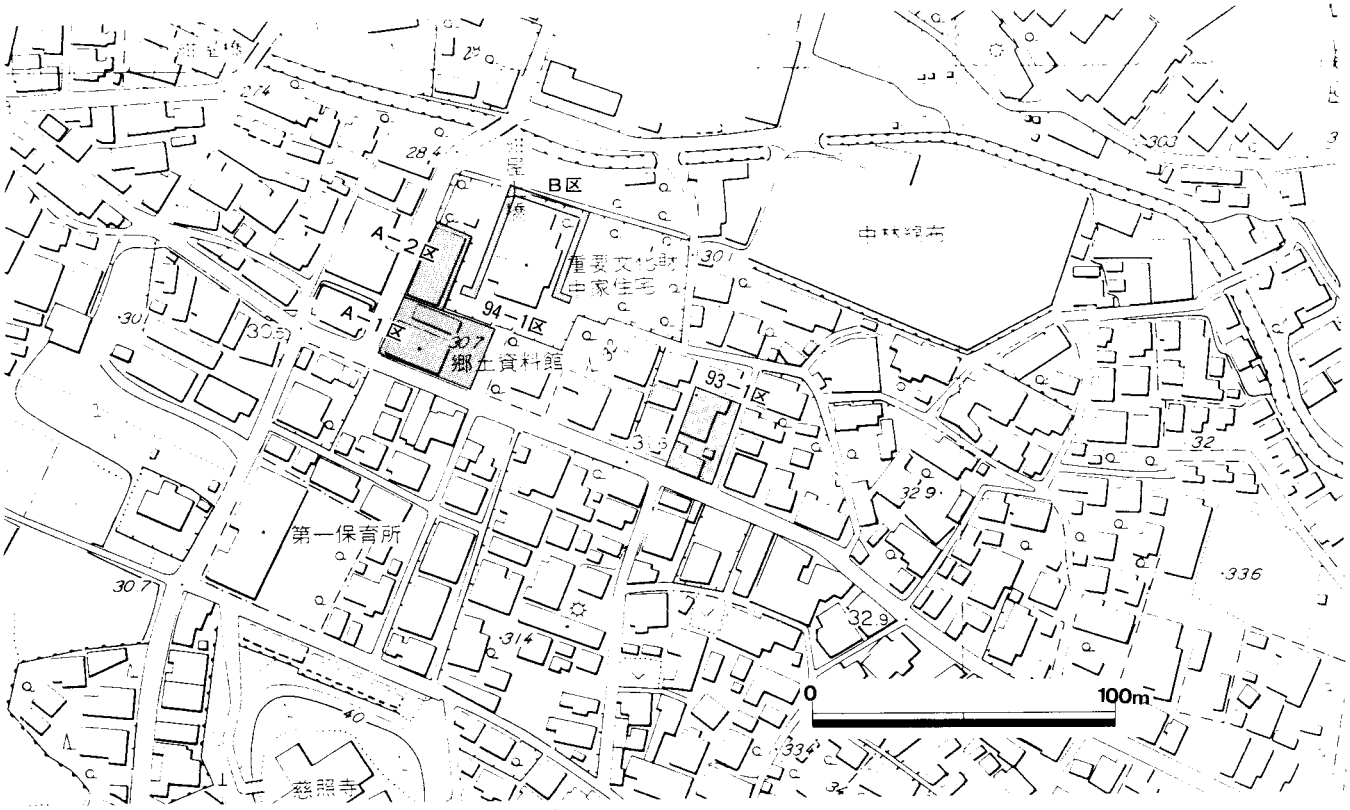
中家住宅は熊取町大字五門に所在し、現在の中家住宅を中心として半径50ｍの範囲の遺跡である。平成５年度に93－１区が今回の調査地点の東へ約100ｍの地点で発掘調査が行われている。調査の成果としては、溝１条（ＳＤ－１）、土壙３基（ＳＫ－１，２，３）、埋甕１基（ＳＵ－１）、柱穴１基（ＳＰ－１）などを検出している。ＳＤ－１は幅0.3m、長さ20m、深さ0.2ｍを測り断面Ｖ字状を呈している。埋土から瓦質の羽釜２点、擂鉢１点、青磁碗１点、土師質皿２点が出土しており、いずれの遺物も15世紀後半から16世紀前半の年代を与えられるものである。ＳＵ－１は溝南側に隣接するようにして検出されている。攪乱等によって上部３分の２を失ってはいるが、16世紀後半から17世紀前半に比定され、内面低部に見られる排泄物のような付着物から便所甕として使用されていたものと思われる。土壙に関しては、ＳＫ－１は16世紀後半から18世紀前半の瓦や唐津の碗・皿・鉢などの陶磁器片が出土しており、廃棄物の捨て場と思われるものである。ＳＫ－２は土師質の甕の口縁部が一点出土している事や、断面形から推測して埋甕があったものと思われる。ＳＫ－３は掘り形が深く底まで掘削することが出来なかったが、形状から井戸ではないかと推測できる。

この地点の小字名を「元屋敷」といい、古くから屋敷が存在していたことが窺えるが、15世紀以降から江戸時代にかけてのいわゆる遺構面が削平を受けている状況なので、当時の建物などの平面配置は正確に復元し得ないが、井戸や便所甕と推定される遺構が検出される等、この場所が江戸期に入った17世紀代には何らかの屋敷地の一角であった可能性を示しているものである[5]。



1. 降井家書院　2. 中家住宅　5. 甲田家住宅　6. 東円寺跡
11. 五門遺跡　12. 五門北古墳　13. 五門古墳　14. 大浦中世墓地
17. 大谷池遺跡　18. 祭礼御旅所跡　20. 小垣内遺跡　25. 降井家屋敷跡
26. 大久保Ａ遺跡　28. 大久保Ｂ遺跡　29. 紺屋遺跡　31. 大久保Ｃ遺跡
33. 口無池遺跡　34. 大久保Ｄ遺跡　35. 大浦遺跡　37. 大久保Ｅ遺跡

第２図．中家住宅周辺の遺跡



第３図．93-1・94-1区 調査区位置図

第２節　調査の契機と経過（94－１区）

熊取町大字五門26－１番地他16筆において、熊取町企画部歴史文化施設整備室より重要文化財中家住宅及び周辺整備の計画がもたらされた。その内容は、中家住宅母屋の防火施設事業における消火設備工事と、中家に隣接する約840㎡の敷地（旧資料館及び個人倉庫）に歴史文化施設整備事業における郷土資料館建設工事である。対象地は周知の遺跡である中家住宅の範囲内であり、遺構・遺物の存在が十分に予想される地点であった。そこで、町史編さん室は郷土資料館建設予定地において、平成６年９月18日より同27日（実働６日）の期間に５ケ所のトレンチ調査を実施し、遺構・遺物・包含層などのデーターを収集した。その結果、所々大きく攪乱を受けているところが見うけられるが、地表面下約0.3～0.4ｍ付近において江戸時代後期に比定される瓦や陶磁器を確認し、さらに下層では中世から近世にかけての陶磁器類を発見するに至った。この成果に基づいて関係機関と協議を行い、建物建設予定地において全面発掘を実施することになりまた、母屋周りの消火設備工事部分については、工事施工時に伴って実施することとなった。全面発掘調査は町史編さん室が担当し、平成６年11月８日から現地調査を実施した。調査は掘削により生じる排土置場を確保するため、調査地をＡ－１（南）・２（北）区と二分割にして調査を進行させた。まず機械による現表土、近代整地層を掘削し、江戸後期の生活面の検出を行った。しかし近代における削平と攪乱によって明瞭な生活面を検出するには至らなかった。つづいて二次生活面にむけて掘削を行い、瓦廃棄土壙・埋甕等の遺構を検出することが出来た。また、中家住宅の母屋周りの地区をＢ地区として、土師質の大埋甕を検出するに至った。

このような成果を得て、平成７年１月６日をもって実働39日間の現地調査を終了した。引続き町史編

さん室において内業整理及び概報刊行作業を行い、平成８年３月に本書の刊行をもって本調査にかかる作業は終了した。

第３章　調査の概要

第１節　基本層序

本調査地点は住吉川流域に形成された低位段丘上に位置し、現地表面でT.P.約31.5ｍを測る。調査区内の土層の堆積状況は旧来資料館などの建造物が建っていたために所々基礎が残っており、また、近代の削平•攪乱を受けている部分が多分に見られかなり荒れたものとなっていた。

基本層序は、１黄褐色系砂質土の現表土、２黄灰色系砂質土の整地層、３灰黄褐色系砂質土の整地層、４明黄褐色系粘質土及び黄橙色系砂礫土の無遺物層である。

第１層は、近現代の盛土で礫を含む砂質土で層厚およそ0.3～0.4ｍである。第２層は、近代の整地層と思われ、新しいガラス片などが混入していた。層厚はおよそ0.1ｍ程度である。第３層は、近世の整地層で江戸時代末期頃に比定される瓦片を含んでいる。この第３層の上面を近世の生活面としてとらえた。層厚はおよそ0.15ｍ程度を測る。第４層は無遺物層で地山としてとらえた。地山となる層は、明黄褐色粘質土層と黄橙色砂礫土層の２つに大別できる。前者はＡ－１区東側で地山の標高が高い箇所に認められる。Ａ－１区北側では明黄褐色粘質土層の下層に黄橙色砂礫土の存在が認められることから、明黄褐色粘質土層の存在しない箇所は削平の結果ともとらえられる。また、Ａ－１区南側、Ａ－２区東側などでは、近世における整地による削平を受けずにそれ以前の土層堆積が確認できる。その層序は、上からⅠ表土、Ⅱ灰白色砂質土層の旧耕作土、Ⅲ橙色砂質土層の旧床土、Ⅳ灰黄褐色砂質土層の整地土となっており、層厚はそれぞれ５㎝程度である。その下層で無遺物層の地山に達する。

第２節　遺　　構

今回検出した遺構は、土壙（ＳＫ）30数基、ピット（ＳＰ）20数基、埋甕（ＳＵ）２基、性格不明土壙（ＳＸ）２基である。土壙は一辺が５ｍを超えるような大型のものから溝状のものまで様々であるが、その中で特徴的なＳＫ04は瓦の廃棄土壙で、平面形を見ると0.9×0.4ｍで定規で線を引いたかの様に整然としており、埋納の様な感じを呈するものである。もう一つは、二重円形のリング状土壙と呼ばれているもので従来「土壙墓」であるとか「樹木抜去痕」と言うようなものであると考えられている。ＳＫ08、09、10がリング状土壙であり、当初前記のような用途を考えていたが詳細に観察するとほぼ真円に近い平面形を呈しており、慎重に掘り下げていくと埋桶と思われる木片が部分的にではあるが残存していた。ピットは20数基検出しており径が0.4～0.1ｍと大小の法量が認められるが、明瞭な柱痕を残すものはなく柱穴であると断定できるものはないと言わざるを得ない。法量が0.1ｍ前後の小ピットは杭穴であると推定される。埋甕は２基検出しているが、１基はＡ－１区で陶質、もう１基はＢ区で土師質の甕である。ＳＸ21、22は平面形およそ3.6×3.6ｍ、3.6×3.4ｍの方形を呈しており、底から大きさ一辺0.3ｍ程度の石が並んで出土したことから建物跡とも考えられる。全体の概要は以上の様なものであるが、次に主要な遺構について略述する。

A－1区　SK05（第4図・図版第4）

調査区の中央南端で検出した。平面長方形の土壙で検出面での法量は2.5×2.6m以上を測る。南側を攪乱によって切られているため全体像はつかめないが、かなり大型の土壙である。断面は検出面から最深部で0.2mを測り、にぶい黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土がレンズ状に堆積する。土壙内から150片以上にも及ぶ多量の瓦が出土しており、瓦の廃棄のために掘削されたものだと推測することができるが、整然とした平面形を持つことから廃棄と言うよりは埋納したものであると考えられる。出土瓦の年代は江戸時代末期と比定され、特に19世紀代の陶磁器が出土している事から投棄された時期は19世紀以降頃と推定される。

SK07（第4図・図版第4）

調査区南辺やや東寄りの地点で検出した。平面形は、南壁にかかる為およそ半分しか検出できなかったが、推定円形の土壙では径は3mを超えるものと思われる。断面はまっすぐ内側に落ち込み、底部は平坦となっており、深さは0.9mを測る。埋土は褐灰色粘土混砂質土一層である。その規格された様な平面形と、常に湧き水があったことから、井戸として使用されていたと推定した。しかし出土遺物が一切含まれていないこと、深さが上面が切られてはいるが0.9mと浅いこと、埋土が一層のみで特徴的な滞水していた痕跡が明瞭には見られないことから疑問の余地も残されている。機能していた時期は出土遺物がないため不明と言わざるを得ないが、土壙上面が江戸期の整地層ではなくそれ以前の耕土と思われる層に切られていることから中性に溯る可能性も考えられる。

SK08（第4図・図版第4）

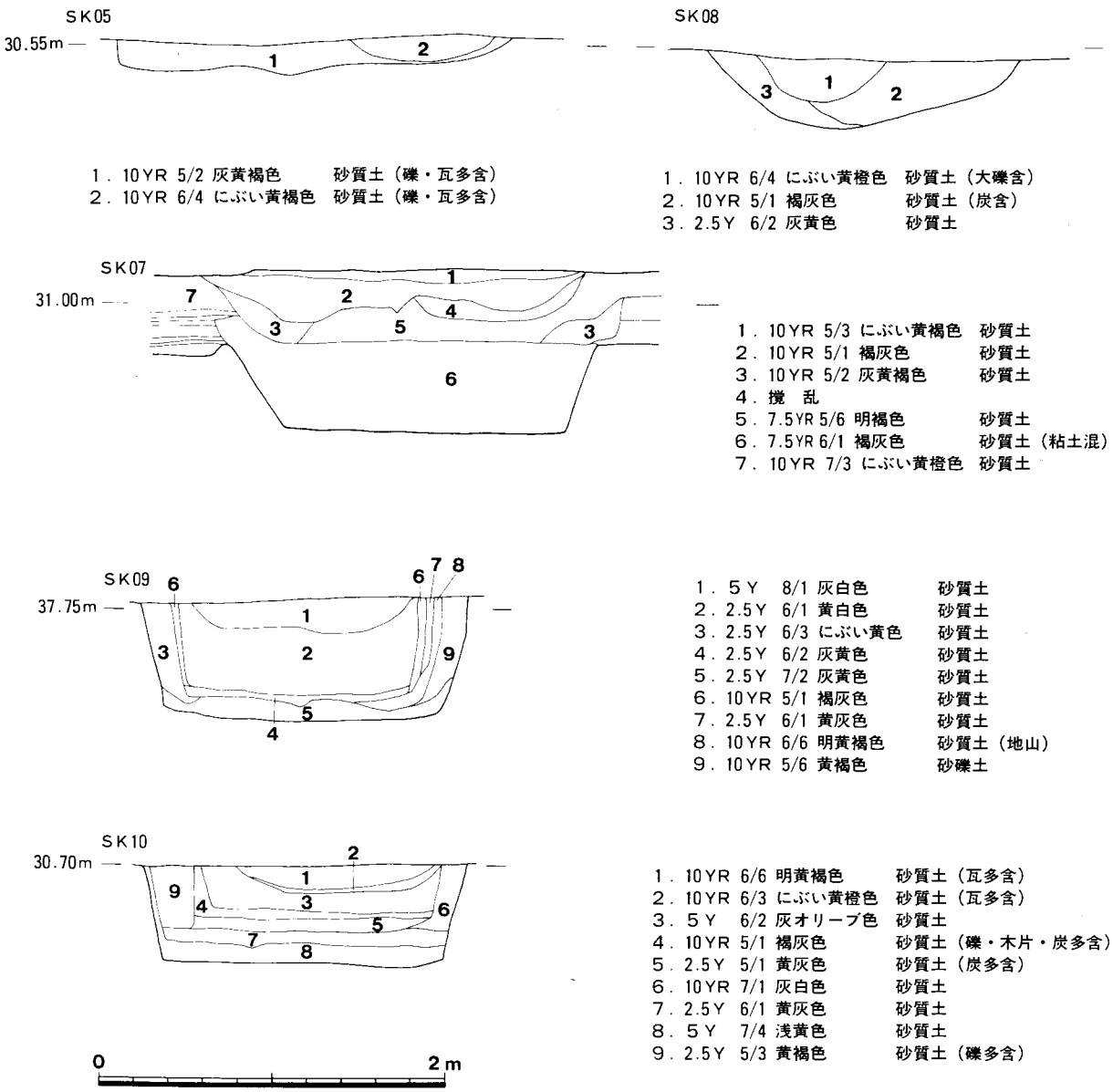
調査区の北東、SK10の南1mの地点で検出した。平面形は二重円形で外環長径0.9m、短径0.6mの楕円形で、内環は0.38mのほぼ真円である。平面形はレンズ状を呈し、最深部で0.2mを測る。埋土は外環部が褐灰色砂質土と黄灰色砂質土で、内環部がにぶい黄橙色砂質土を呈している。出土遺物は江戸時代後期に比定される瓦片が若干出土している。リング状の土壙で内環がほぼ真円を呈していることから埋桶等のものが存在していたと考えられるが、埋桶自体全く残存しておらずまた、SK09・10.などと比較すると規模も小さく、断面形態も全く異なることから単に楕円形の土壙の上から円形の土壙が掘込まれたものである可能性も考えられる。

SK09（第4図・図版第4）

調査区の北東隅で検出した。平面形は二重で外環円形、内環はほぼ真円のリング状土壙である。検出面での径は外環1.92m、内環1.60mを測る。垂直に落ちる壁面を持ち、深さは0.7mである。第4層では厚さ2～3㎜程度の木板片がかなり腐朽しているものの部分的に残存しており、埋桶が存在していたものと思われる。埋桶だと推定すると残存高0.57m、残存上部径1.4m、底部径1.25mを測る。上面が削平されていることと、埋桶自体がかなり腐朽している事に加えて部分的にしか残存していないため取り上げることは出来ず、形状・組成などの詳細は不明である。埋土は桶内が明黄褐色、にぶい黄橙色砂質土で瓦や土製の壁もしくは塀の土塊を多量に含んでいる。これは埋桶として機能しなくなった後に瓦や土塊の廃棄坑になったものと推測できる。裏込めの土からは遺物が出土しないことから埋桶として機能していた時期は不明と言わざるを得ないが、桶内出土瓦の年代観から廃絶した時期は江戸時代末期頃と推定されるので、それ以前と言うことになるだろう。

ＳＫ10（第４図・図版第４）

ＳＫ09の西隣0.3ｍの地点で検出したリング状土壙である。平面形はＳＫ09とほぼ同様で、検出面での径は外環1.85ｍ、内環で1.44ｍを測る。断面の様相はＳＫ09とかなり酷似しているが、深さは0.5ｍのと若干浅めである。しかし埋桶は残存しておらず、取り上げた後に廃絶したか、もしくは完全に朽ちてしまったかであろう。そのため、埋桶自体の詳細は一切不明であるが平面形、断面形から推測するとＳＫ09とほぼ同規模のものだったと思われる。第３層の埋土からＳＫ09と同様の瓦が出土していることから、後に瓦の廃棄坑となり、機能していた時期、廃絶した時期も同時期程度と推定できる。また用途もＳＫ09と同様資料不足のため不明と言わざるを得ない。



1．10YR 5/2 灰黄褐色　砂質土（礫・瓦多含）
2．10YR 6/4 にぶい黄褐色　砂質土（礫・瓦多含）

1．10YR 6/4 にぶい黄橙色　砂質土（大礫含）
2．10YR 5/1 褐灰色　砂質土（炭含）
3．2.5Y 6/2 灰黄色　砂質土

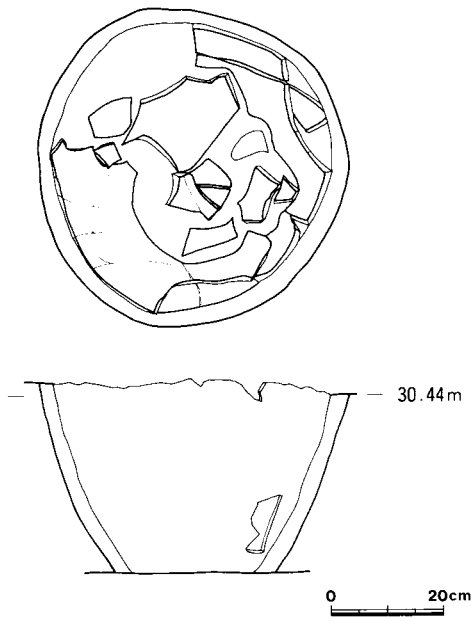
1．10YR 5/3 にぶい黄褐色　砂質土
2．10YR 5/1 褐灰色　砂質土
3．10YR 5/2 灰黄褐色　砂質土
4．撹　乱
5．7.5YR 5/6 明褐色　砂質土
6．7.5YR 6/1 褐灰色　砂質土（粘土混）
7．10YR 7/3 にぶい黄橙色　砂質土

1．5Y 8/1 灰白色　砂質土
2．2.5Y 6/1 黄白色　砂質土
3．2.5Y 6/3 にぶい黄色　砂質土
4．2.5Y 6/2 灰黄色　砂質土
5．2.5Y 7/2 灰黄色　砂質土
6．10YR 5/1 褐灰色　砂質土
7．2.5Y 6/1 黄灰色　砂質土
8．10YR 6/6 明黄褐色　砂質土（地山）
9．10YR 5/6 黄褐色　砂礫土

1．10YR 6/6 明黄褐色　砂質土（瓦多含）
2．10YR 6/3 にぶい黄橙色　砂質土（瓦多含）
3．5Y 6/2 灰オリーブ色　砂質土
4．10YR 5/1 褐灰色　砂質土（礫・木片・炭多含）
5．2.5Y 5/1 黄灰色　砂質土（炭多含）
6．10YR 7/1 灰白色　砂質土
7．2.5Y 6/1 黄灰色　砂質土
8．5Y 7/4 浅黄色　砂質土
9．2.5Y 5/3 黄褐色　砂質土（礫多含）

第４図．Ａ－１区遺構断面図

ＳＵ－01（図版第４）



第５図．SU01出土状況図

調査区南東端で検出した。甕は陶質で黒褐色の釉に白濁釉が渦巻状に化粧掛けされている。残存高はおよそ53cmで復元しても60cmは超えないものと思われる。その内およそ半分の32cmが地山に埋まった状態で検出した。しかし上部のおよそ20cmは削平のためか破片化しており、また失われており検出することは出来なかった。用途は陶質の甕であること、便所甕特有の付着物が見られないこと等から、水甕等として使用されていた可能性が考えられる。

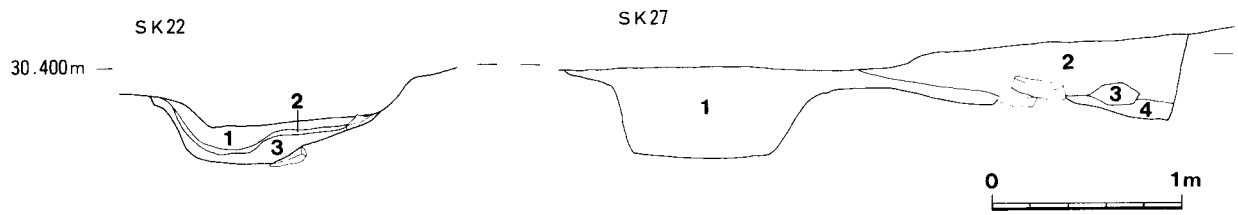
地山の標高は30.3ｍを測り、その上には本来中世期やそれ以前の土層が堆積していたと考えられ、母屋の礎石は現在の地表面に並んでみられるが、その標高は31.5ｍである。両者の比高差は1.2ｍとなり中家住宅の母屋の変動がないとすれば、埋甕はかなり低位置に埋設されていたことになる。

Ａ－２区　ＳＫ22（第６図・図版第５）

調査区の南東隅の地点で検出した。平面形は1.5×1.9ｍの楕円形を呈しており、断面形は逆台形で深さ0.2ｍを測る。ただし、上面は削平されていることが考えられる為に、実際はもっと深かったものと推測できる。埋土は褐灰色砂質土、黒色砂質土、暗灰黄色砂質土である。出土遺物は陶磁器片約40点、瓦10数点、その他土製の壁もしくは塀と思われる土塊が出土している。いずれも18世紀後半から19世紀以降に比定されるものである。この出土遺物の量から見てその用途は廃棄土壙と考えてよいだろう。

ＳＫ－27（第６図・図版第５）

調査区の南東隅で、ＳＫ22の南側およそ1.5ｍの地点で南壁に半分かかって検出した。平面形は不定形で大きさ3.8×1.8m以上を測る。断面も部分的に攪乱されており、不定形を呈する。埋土は暗灰黄色砂質土、明黄褐色砂質土で出土遺物は17世紀中頃に比定される唐津皿を含む陶磁器片約10点、瓦片約20点、石臼２点、ＳＫ22と同様の土魂が出土している。用途は廃棄土壙と考えてよいだろう。



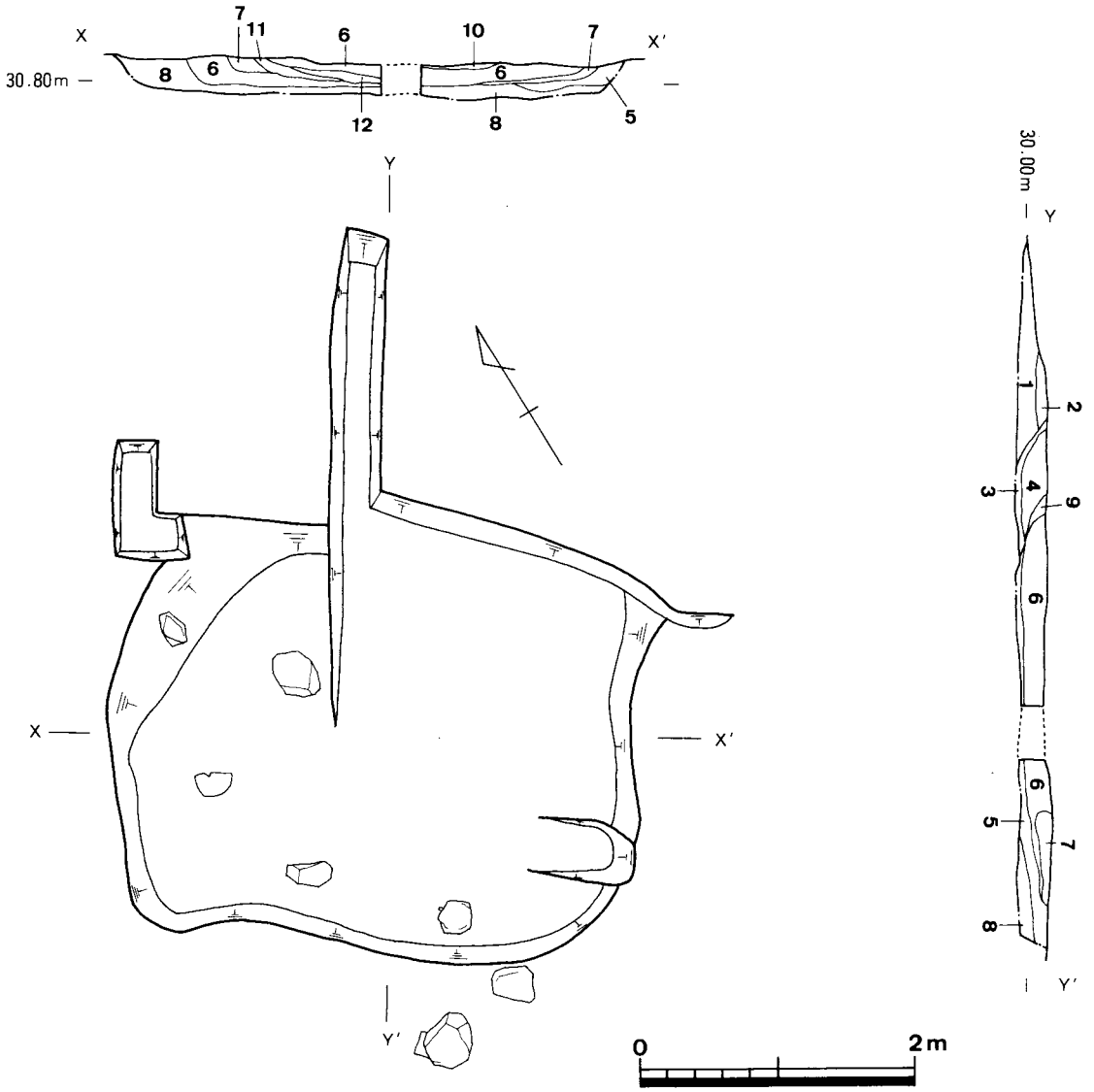
１．10YR 4/1 褐灰色　砂質土（瓦多含）
２．10YR 2/1 黒　色　砂質土（瓦・炭多含）
３．10YR 5/2 暗灰黄色 砂質土（瓦多含）

１．2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土（撹乱、瓦・礫多含）
２．10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土（瓦多含）
３．５G 7/1 明緑灰色 シルト
４．10YR 6/6 明黄褐色 砂質土（地　山）

第６図．Ａ－２区遺構断面図

ＳＸ21（図版第５）

調査区北端で検出した。平面形は3.6×3.4ｍのやや歪な方形を呈しており、深さは0.15ｍを測る。遺構内から一辺0.3～0.4ｍ程度の石が８点ほど出土し、礎石と考えられ、平面形態からも建物跡ではないかと思われる。しかし礎石と思われる石は変動しているのか並び方は不規則であり、詳細は不明である。また、埋土に焼土が含まれていることから火災により消失したものと考えられる。出土遺物は17世紀代に比定される瀬戸・美濃の天目茶碗、土師質の皿、その他瓦片２点、土製の壁もしくは塀と思われる土塊が出土している。

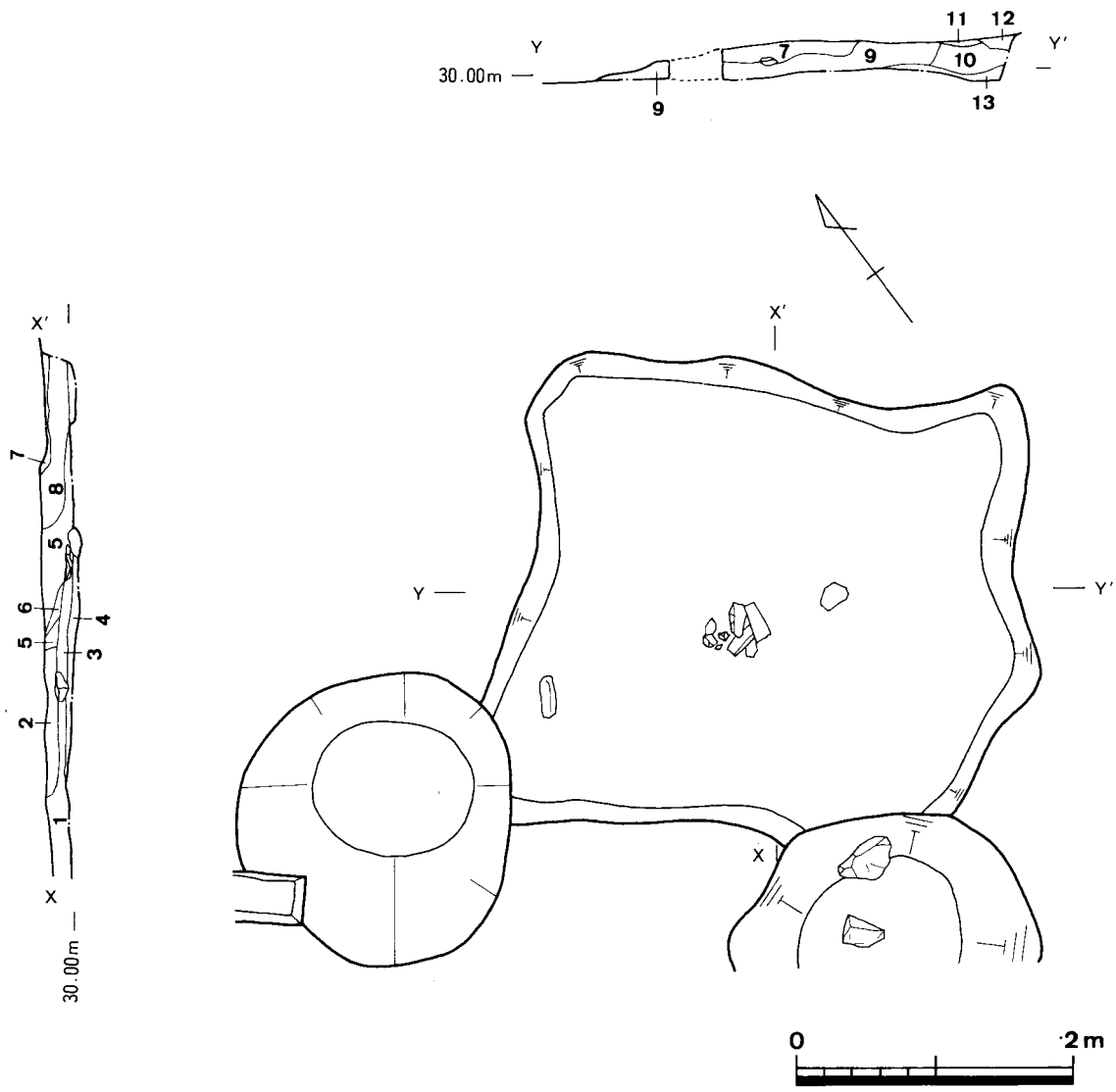


1. 2.5Y 7/6 明黄褐色 砂質土（地　山）
2. 10YR 7/1 灰白色 砂質土（炭　含）
3. 7.5YR 7/1 明褐灰色 砂質土
4. 5Y 7/3 浅黄色 砂質土
5. 5Y 7/2 灰白色 砂質土（礫　含）
6. 2.5Y 7/3 浅黄色 砂質土（炭　含）
7. 7.5YR 4/3 褐　色 砂質土（焼　土）
8. 2.5Y 6/4 にぶい橙色 砂質土（礫多含、地山）
9. 2.5Y 6/1 黄灰色 砂質土
10. 2.5Y 5/4 黄褐色 砂質土（炭・礫含、焼土）
11. 2.5Y 8/6 黄　色 砂質土（焼　土）
12. 2.5Y 8/1 灰白色 砂質土（焼　土）

第７図．ＳＸ21平面図・断面図

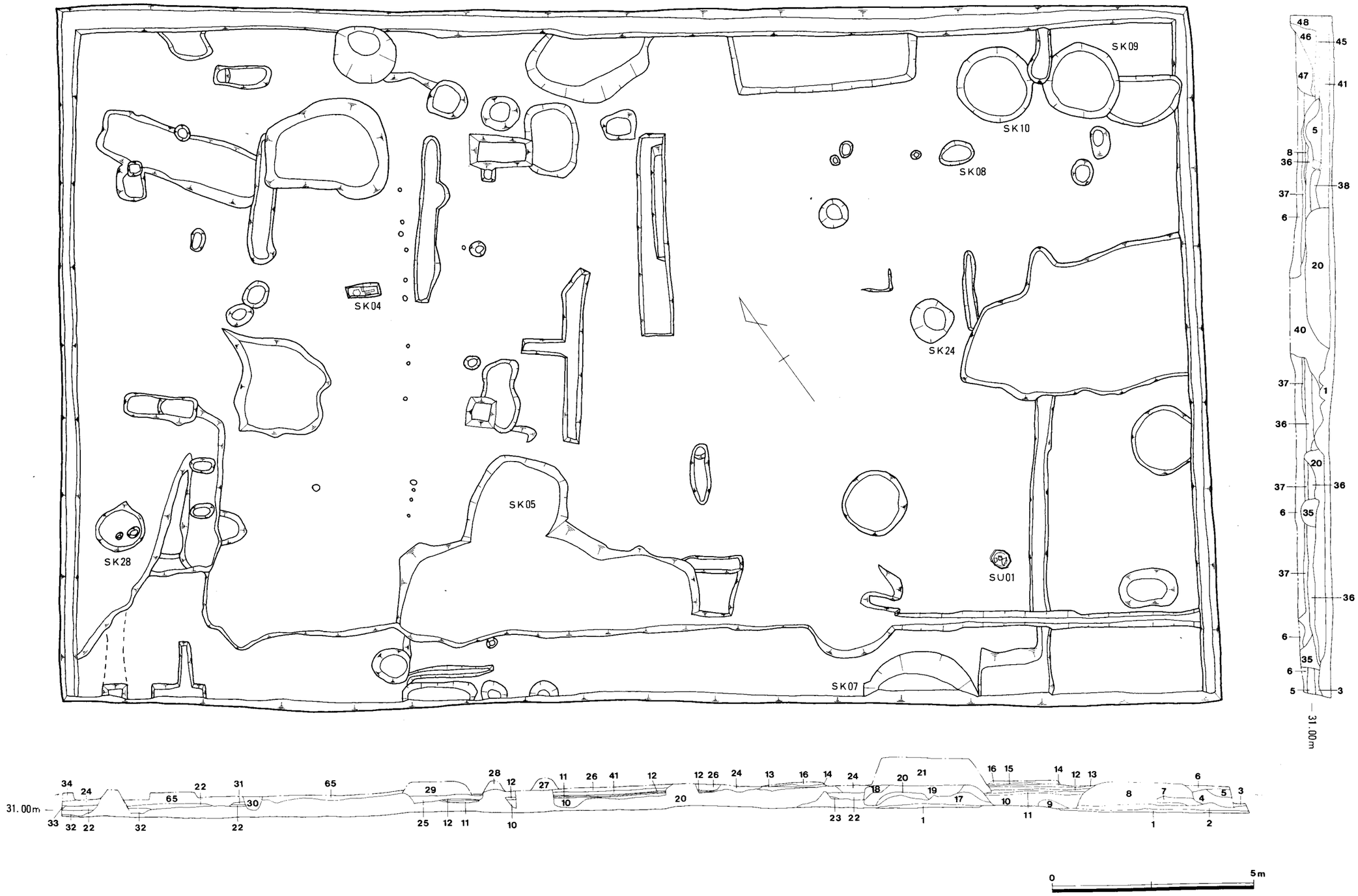
ＳＸ22（図版第５）

調査区のほぼ中央で検出した。平面形は一辺3.6ｍ四方のやや歪つな方形を呈しており、深さはおよそ0.15ｍを測る。ＳＸ21と同様に一辺0.2～0.3ｍの石が出土しており建物跡と考えられる。ＳＸ21同様埋土に焼土が含まれる。他の出土遺物は16世紀末から17世紀初頭に比定される備前の壺片、土師質の皿などを含む陶磁器片３点、瓦片が１点出土している。

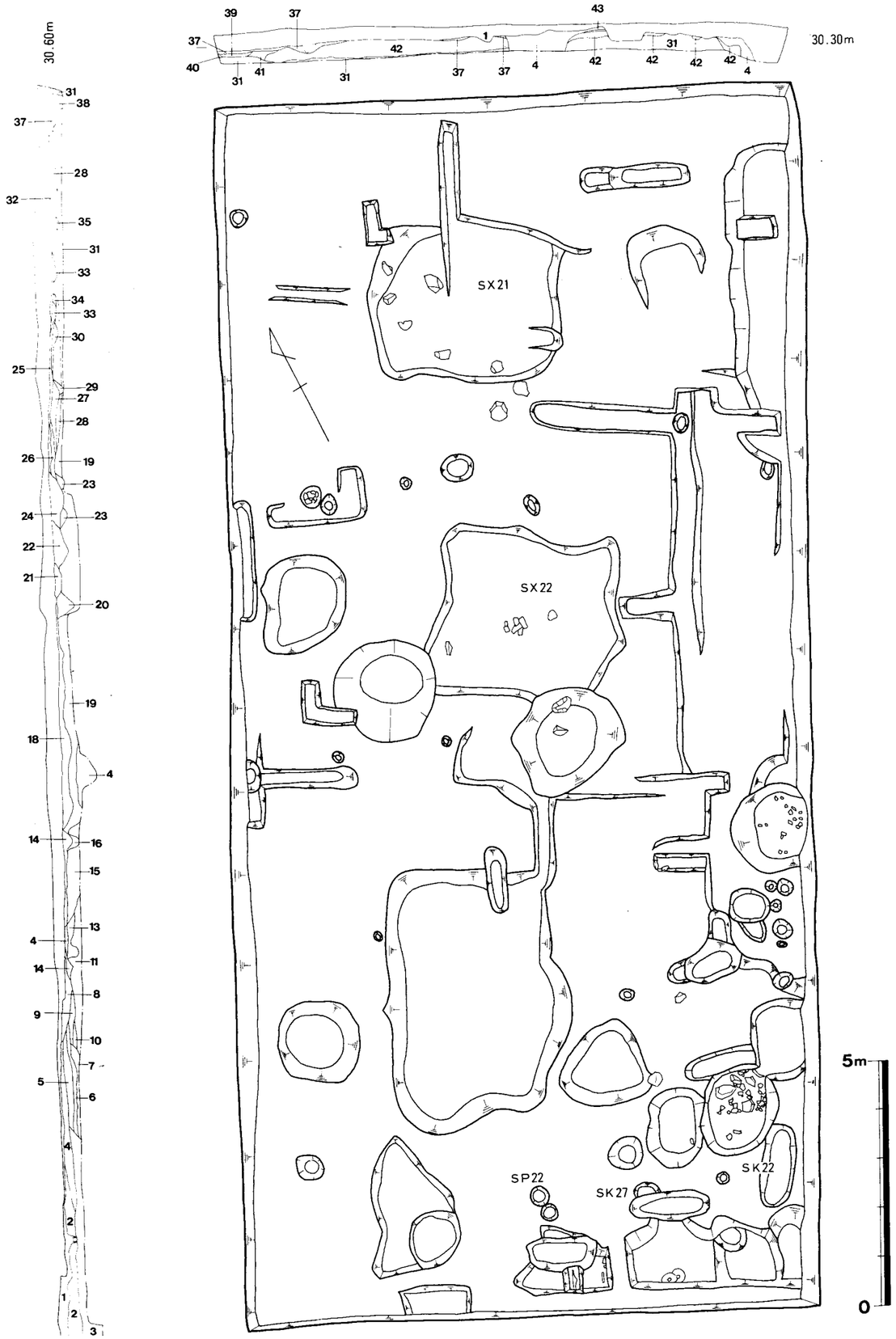


1.	10YR 6/1	褐灰色	砂質土		
2.	2.5Y 6/3	にぶい黄色	砂質土		
3.	7.5YR 5/2	灰褐色	砂質土		
4.	5Y 8/2	灰白色	砂質土		
5.	5Y 7/2	灰白色	砂質土（礫含）		
6.	2.5Y 5/3	黄褐色	砂質土		
7.	7.5YR 4/3	褐　色	砂質土（焼土）		
8.	2.5Y 7/3	浅黄色	砂質土（炭含）		
9.	10YR 5/1	褐灰色	砂質土		
10.	10YR 6/1	褐灰色	砂質土		
11.	5Y 7/1	灰白色	砂質土		
12.	2.5Y 7/6	明黄褐色	砂質土		
13.	10YR 6/1	褐灰色	砂質土		

第８図．ＳＸ22平面図・断面図



第９図．Ａ－１区 平面図・断面図



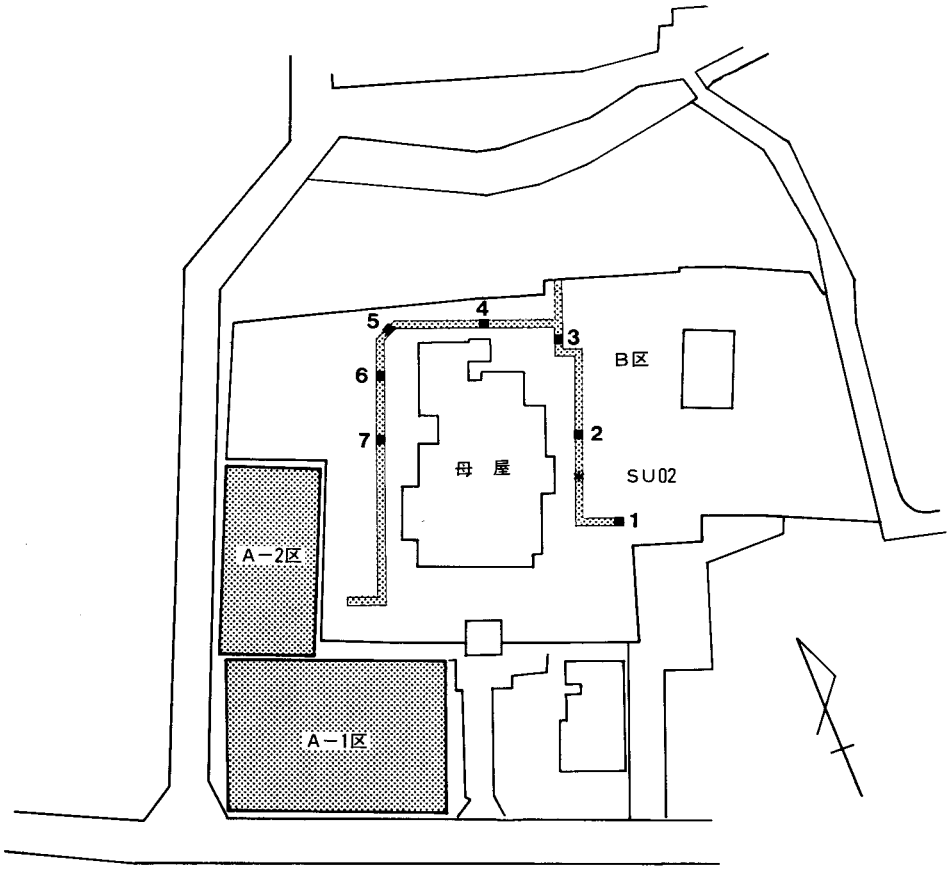
A－１区

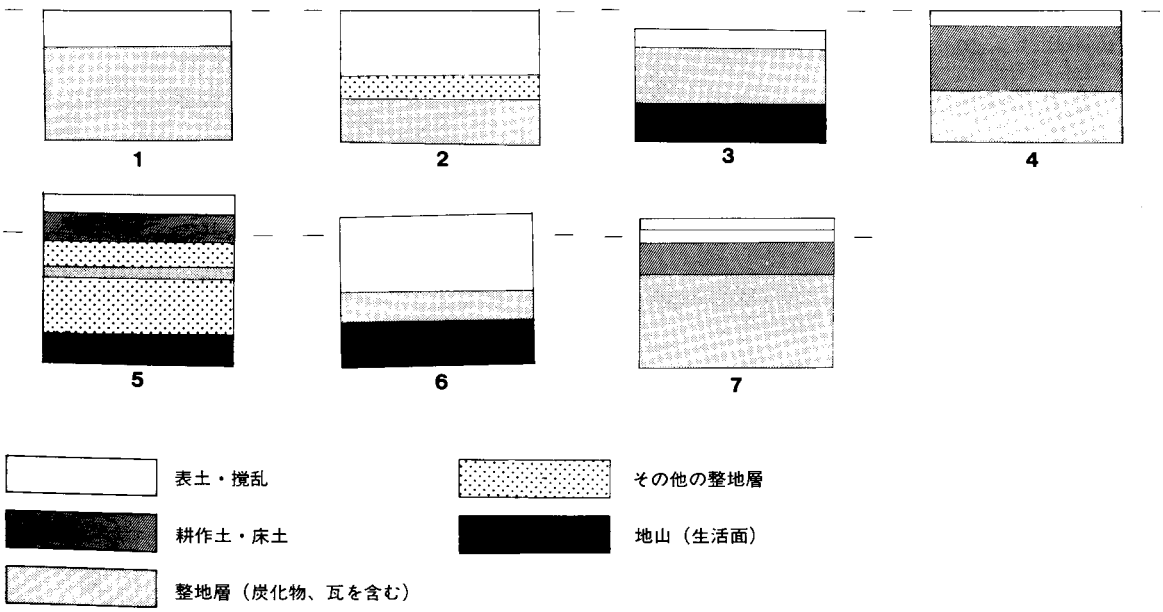
1．10YR	5/3 にぶい黄褐色	砂質土（表　土）
2．2.5Y	6/1 黄灰色	砂質土
3．2.5Y	7/4 浅黄色	砂質土
4．10YR	7/2 にぶい黄橙色	砂質土
5．2.5Y	8/1 灰白色	砂質土（木の根あり）
6．10YR	6/8 明黄褐色	粘質土（地　山）
7．10YR	5/1 褐灰色	砂質土
8．10YR	7/2 にぶい黄橙色	砂質土（粘土ブロックを含む）
9．10YR	6/1 褐灰色	砂質土
10．10YR	7/3 にぶい黄橙色	砂質土
11．10YR	7/1 灰白色	砂質土（旧耕作土）
12．7.5YR	6/6 橙　色	砂質土（床　土）
13．10YR	6/2 灰黄褐色	砂質土（整地層）
14．7.5YR	6/1 褐灰色	砂質土（マンガン斑あり）
15．7.5YR	5/2 灰褐色	砂質土（マンガン斑あり）
16．10YR	8/3 浅黄橙色	粘質土（地　山）
17．10YR	5/1 褐灰色	砂質土
18．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土
19．7.5YR	5/6 明褐色	砂質土
20．撹　乱		
21．7.5YR	6/1 褐灰色	砂質土（粘土混）
22．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土
23．2.5Y	6/3 にぶい黄色	砂質土
24．2.5Y	7/2 灰黄色	砂質土
25．7.5YR	5/2 灰褐色	砂質土（耕作土）
26．7.5YR	5/1 褐灰色	砂質土（礫混）
27．SK21埋土		
28．SK20埋土		
29．SK19埋土		
30．10YR	5/6 黄褐色	砂質土
31．10YR	4/2 灰黄褐色	砂質土
32．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土（木の根あり）
33．10YR	7/1 灰白色	砂質土
34．10YR	6/8 明黄褐色	砂質土（地　山）
35．2.5Y	7/1 灰白色	砂質土（瓦多含）
36．10YR	6/1 褐灰色	砂質土
37．10YR	5/3 にぶい黄褐色	砂質土（木の根あり）
38．10YR	6/1 褐灰色	砂質土（木の根・瓦含）
39．10YR	6/1 褐灰色	砂質土（木の根・瓦含）
40．10YR	7/1 灰白色	砂質土
41．10YR	5/1 褐灰色	砂質土（礫多含）
42．10YR	7/1 灰白色	砂質土
43．2.5Y	7/1 灰白色	砂質土（木の根あり）
44．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土（マンガン斑あり）
45．10YR	6/1 褐灰色	砂質土（瓦　含）
46．2.5Y	6/1 黄灰色	砂質土（炭　含）
47．2.5Y	8/1 灰白色	砂質土（礫多含）
48．2.5Y	7/1 灰白色	砂質土

A－２区

1．10YR	5/6 黄褐色	砂質土（盛　土）
2．2.5Y	7/6 明黄褐色	砂質土（粘土混）
3．2.5Y	5/2 暗灰黄色	砂質土
4．撹　乱		
5．2.5Y	6/2 灰黄色	砂質土
6．2.5Y	5/1 黄灰色	砂質土
7．5Y	8/3 淡黄色	粘質土
8．10GY	6/1 緑灰色	粘質土
9．2.5Y	7/2 灰黄色	砂礫土
10．5BG	7/1 明青灰色	粘質土
11．10YR	6/4 にぶい黄橙色	砂礫土（地　山）
12．2.5Y	6/2 灰黄色	砂質土（ややシルト質）
13．10YR	6/3 にぶい黄橙色	砂礫土
14．2.5Y	6/2 灰黄色	砂質土
15．2.5Y	7/3 浅黄色	砂質土（ややシルト質）
16．2.5Y	5/2 暗灰黄色	砂質土
17．2.5Y	6/3 にぶい黄色	砂質土
18．10YR	6/2 灰黄褐色	砂質土
19．2.5Y	6/3 にぶい黄色	砂質土
20．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土
21．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土
22．2.5Y	6/1 黄灰色	砂質土
23．2.5Y	7/3 浅黄色	粘質土（砂　混）
24．2.5Y	5/2 暗灰黄色	砂質土
25．2.5Y	5/3 黄褐色	砂質土
26．7.5YR	5/1 褐灰色	砂質土（焼土混）
27．2.5Y	6/3 にぶい黄色	砂質土（粘土混）
28．10YR	5/2 灰黄褐色	砂質土
29．2.5Y	4/2 暗灰黄色	砂質土
30．2.5Y	4/6 にぶい黄色	砂質土（礫　混）
31．2.5Y	7/6 明黄褐色	砂質土（地　山）
32．2.5Y	5/2 暗灰黄色	砂質土
33．10GY	6/1 緑灰色	粘質土
34．2.5Y	6/1 黄灰色	砂質土
35．2.5Y	7/8 黄　色	砂質土
36．10YR	6/4 にぶい黄橙色	砂質土（地山の漸移層）
37．10G	4/1 暗緑灰色	砂質土
38．10YR	4/2 灰黄褐色	砂質土
39．10YR	3/2 黒褐色	砂質土（炭　含）
40．2.5Y	7/4 浅黄色	砂質土
41．10YR	5/3 にぶい黄色	砂質土（粘土混）
42．10YR	5/3 にぶい黄色	砂質土
43．7.5YR	5/6 明褐色	砂質土（炭　含）

第10図．Ａ－２区 平面図・断面図

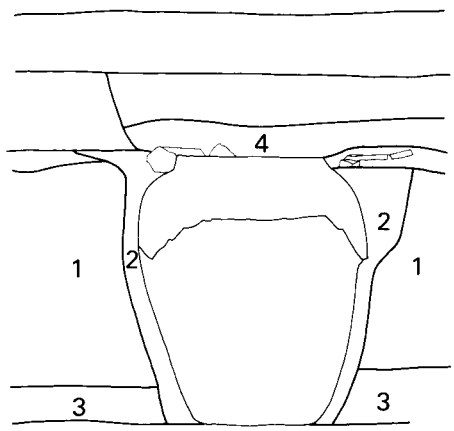




第11図．B区調査位置図・柱状断面図

B区　SU02（図版第5）

母屋の東側およそ5mの地点でほぼ完全な状態で検出した。土師質の大甕で、法量は器高84.2cm、口縁部36.3cm、底部径25.0cmを測るかなり大きいもので、内部に便所甕特有の付着物の様なものが認められる為に糞尿用と推定した。甕の口縁部と当時の生活面はほぼ一致すると思われ、標高30.9mを測る。すぐ隣の母屋の生活面と比べると0.6mの比高差がある。A－1区の埋甕と比べると、ほぼ同じ値を示している。母屋の基礎には変動の痕跡がないので現在の生活面から0.6mとかなり深い位置に埋設されていることから考えると、現在の中家住宅創建以前の遺構とも考えられる。



1．2.5Y　7/8 黄　色　　粘性砂質土
2．2.5Y　6/1 黄灰色　　砂質土
3．2.5Y　6/4 にぶい黄色 砂礫土
4．7.5YR 6/2 灰褐色　　砂質土

0　50cm

第12図．SU02断面図

第3節　遺物

出土した遺物はほとんどが遺構内からのものであり、コンテナに換算しておよそ20箱を数える。その大半は近世の陶磁器片と瓦片である。中には中世の瓦器、土師器、東播系須恵質土器、土製の錘、青磁などと、奈良時代に比定される須恵器が存在していた。ただし、いずれの遺物も細片化しており、量的にも僅かである。以下個々の遺物について略述する。

肥前系磁器染付碗（第13図1～8）

全て手描きによる梅樹文および網目文の施文を行っており、また内面底部の処理技法は、内面総釉のものと、見込み部分を蛇の目状に釉剥ぎしているものと2種類が存在している。

1・2・8は内面総釉であり、外面1は梅樹文、2は雪持ち笹文、8は二重網目文である。また1・2は高台内に判読不明の銘を有する。

3～7は、外面は梅樹文の染付、見込み部を釉剥ぎし、釉剥ぎ部に重ね焼き痕が残っている。

肥前系磁器染付皿（第13図10・11）

共に蛇の目凹形高台で、蛇の目状に釉剥ぎを行ってある。10は高台内に「太明年製」の銘を有し、11は口縁部に口錆を施している。

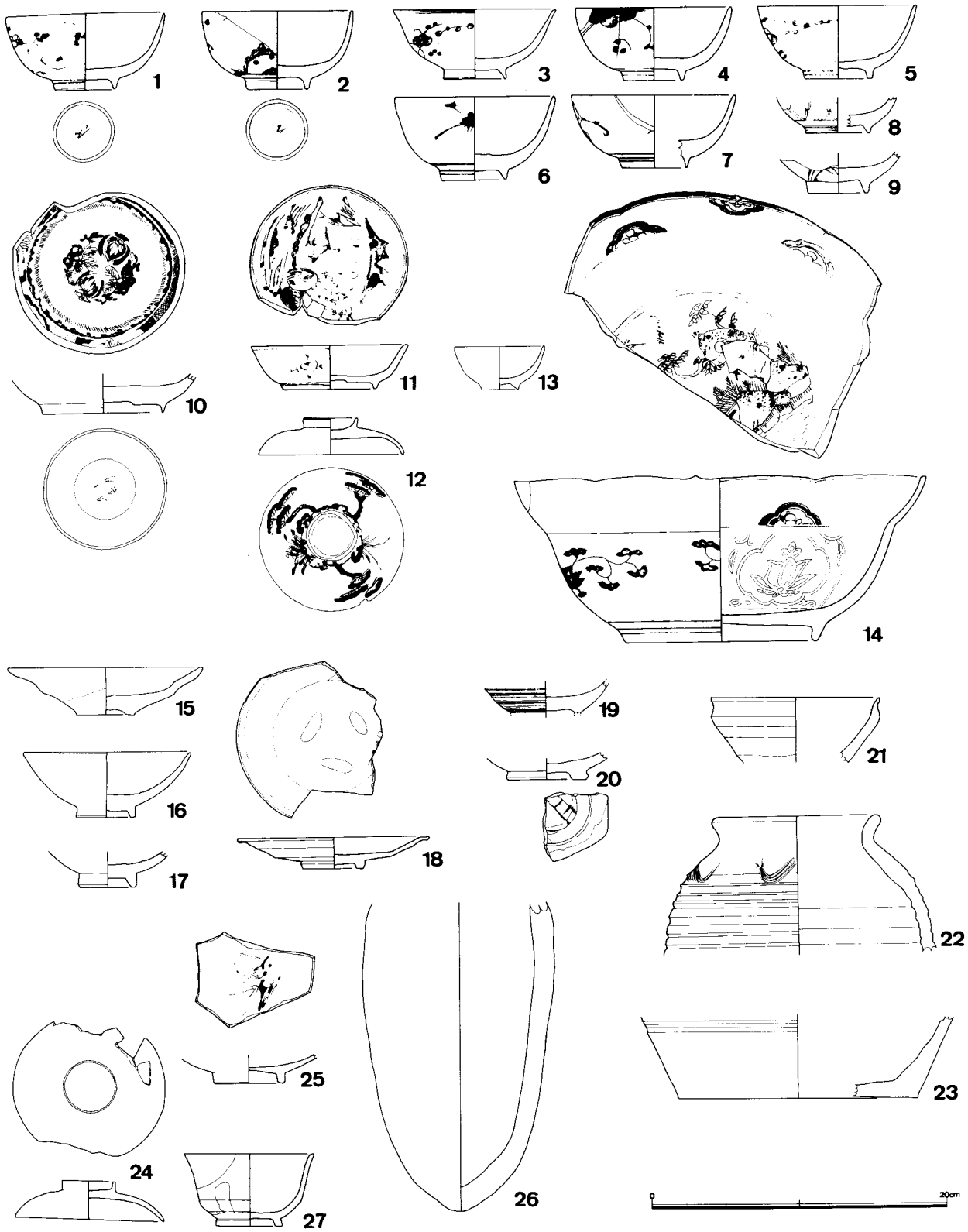
その他の肥前系陶磁器（第13図9・12～14）

9は白化粧土による刷毛目の陶器である。内外面共にいわゆる雲刷毛目を施している。

12は蓋で外面に松文を染付している。13は盃で内外面共染付は施していない。14は輪花の鉢で高台内に一重圏線を巡らし、福字の底裏銘を有する。

唐津系陶器（第13図15～20）

15は内面総釉の碗で見込みに砂目跡が4ケ所残っている。外面は上位の部分的に釉が掛かっている。16・17は内野山西窯系の銅緑釉を施釉する碗で、高台部露胎、見込み部に蛇の目釉剥ぎを行っている。

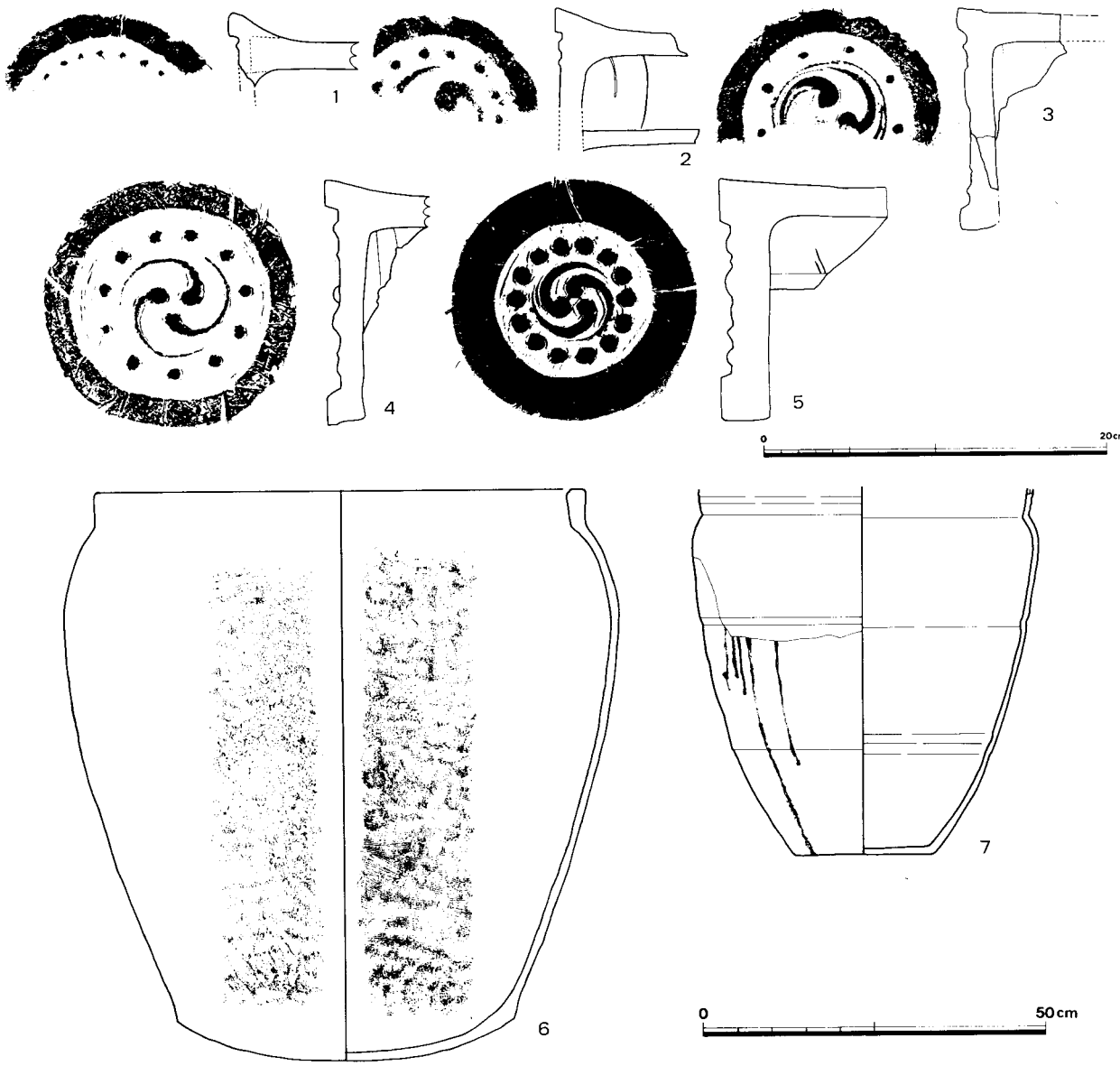

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
20cm

第13図　出　土　遺　物

18は折れ縁の皿で白濁釉が施され高台及びその付近は露胎である。見込み部に砂目跡が3ケ所残っている。高台は兜巾高台を呈している。19は白化粧土による内外面刷毛目装飾を施す碗である。20は内面総釉、外面高台部は露胎である。また高台内に判読不明の墨書が見られる。

その他の遺物（第13図22～27・第14図1～7）　21は瀬戸・美濃系陶磁器天目茶碗である。口縁部から胴部にかけて褐釉がかかり以下露胎である。22は備前の壺で、肩部に波状文を施し、内外面部分に自然釉が掛かっている。23は丹波壺の底部である。24・25は肥前系京焼風磁器で、24は蓋でつまみ部のみ露胎で内部にくずした「清水」の刻印を有し、25は見込み部に染付を施している。26は砲弾型の土師質蛸壺である。27は関西系と呼ばれている碗で、胴部に楕円形の無釉部が数ケ所ある。

第14図1は鳥衾である。2～5は巴文軒丸瓦で、巴の巻き込む方向は2・5が右、3・4が左方向である。また珠文数は4が11個、5が14個である。6・7は前述の埋甕である。



第14図．出土遺物

以上簡単ではあるが個別に説明してきたが、次にその全体の年代観について言及してみる。
今回の発掘調査で出土した遺物の約半分以上瓦が占め、残りが近世の陶磁器である。年代的に大別すると、4時期に分けることが出来る。16世紀末から17世紀初頃の鳥衾や備前の壺、17世紀前期から中頃の唐津碗・皿や軒丸瓦、18世紀代の肥前系磁器、そしてその他大半は19世紀以降と思われる丸・平瓦や陶磁器で占められている。中家住宅創建当時と思われる17世紀代の瓦は僅か数点のみ出土しただけである。

今回多量に出土した19世紀以降の瓦を除くと次に出土率が高いのは陶磁器であるが、その中でも肥前系の磁器が取り分け多く出土している。その特徴としては、いわゆるくらわんか手といわれるもので、丸碗のみの出土で筒型碗・端反碗等は見られなかった。また装飾的には、簡略化された梅樹文を手書きで施したもののみでコンニャク印版を用いたものは見られなかった。また内面処理法は、内面総釉のものと蛇の目状に釉剥ぎしたものが半々程度に存在する。さらに高台内部に判読不明ではあるが底裏名を有するものも存在する。また二重網目文碗は内面無釉のものが一点ではあるが出土している。これらから18世紀前期から中期頃という時期が与えられるだろう。この時期の遺物が多量に出土すると言うことは、18世紀半ばに大幅な解体あるいは増改築工事が行われたものと推測できる。

その他に多量に出土するのが19世紀以降の雑多な陶磁器類及び瓦であり、恐らくこの時期に大幅な解体・規模縮小等が行われたものと思われる。

以上のように出土遺物から大別して4時期に分けることが出来たが、17世紀から19世紀の間に最低4回の増改築・解体などの変動があったことが推測できるが、中家住宅創建当時と思われる17世紀代前期から中期頃の遺物は数点しか出土しておらず創建時期等、詳細な起源を探る事はできず、今後の調査・研究を含め課題と言えるだろう。

第4章　まとめ

今回の調査地点は、狭小ながら母屋から3～4mしか離れていない地点と隣接する地点の調査と言うことで中家住宅の起源に迫ることが出来るかも知れないという期待があった。現在残っている古い建物は、母屋とそれに接続する座敷、唐門及び表門のみであるが、往古の図（年代未詳・第14図）を見ると、他に客室と思われる大きい棟、長屋、馬屋、その他付属の建物があり、またその周囲には堀や塀で囲まれた堂々たる構えをしのばせている。しかし、明治五年の図によると、敷地が大幅に縮小され多くの建物が撤去されているようである。このような豪壮な建築は他に例を見出し難くその原形は細部にわたり種々な点で古い形式を示しているもので桃山調をとどめており、江戸時代初期を降らない時期に建てられたものではないかと考えられている。しかしこの現存する母屋や座敷については、古図に見えているものと間取りの外廓は一致するものの、内容はかなり変更されており、また実物についてもかなりの改造が指摘されている[6]。しかし、その礎石に関しては一部抜き取られているものはあるが、その他は3～10cm程度の沈下はあるものの変動は見られないようである[1]。

さて、前章まで歴史文化施設整備事業における郷土資料館建設工事及び重要文化財中家住宅防火施設事業における消火設備工事に伴う中家住宅94－1区発掘調査の概要を述べてきたが、その調査成果を基に古図や文書と照らし合わせながら考察し、まとめを述べてみたい。

先ず今回の調査成果をまとめてみる。

①中家住宅母屋から15m程東の地点（A－2区）において礎石と思われる石を検出し、建物跡と推定される遺構を検出した。

②母屋から3、4mしか離れていない地点（B区）で便所甕と思われる埋甕を検出した。

③A－2区においてリング状土壙6基を検出し、それが埋桶であると推測できること、但し桶そのものが検出できたのは2基だけである。

④遺物において16世紀末から17世紀初頭、17世紀中頃、18世紀前半から中頃、19世紀以降の4つの時期に比定される陶磁器類及び瓦が多数出土している。

以上の4つが挙げられる。以下に各々の問題点等述べてみる。

①については、若干の問題がある。その検出地点を古図と照らし合わせてみると、その地点に建物などが建っていた形跡は両古図（年代未詳・明治5年）において該当する建物は見られないと言うこと。これは、その検出した地点の標高が現在の中家住宅が建っている地表面と比べると、1.20mも低い地点であることを考えるとその古図が作成される遥か以前もしくは以後に建てられたものであるとも考えられる。また礎石と考えられる石も正確に並んではなく、これは後世に移動したことが多分に考えられるが、石そのものが小さく、平坦でないためあまり礎石として向いていないものがある。特にSX22で検出したものはそうである。前章ではSX21•22を建物跡として推定したが以上のことにより、疑問の余地があることを付け加えておく。

②については、甕内部に便所甕によく見られるような付着物があることから便所甕と推定したが、科学的分析をしたわけではないのでそう断定できるものではなく、水甕、蔵骨器などの可能性も考慮しなければならない。この出土地点を古図と照らし合わせてみると真上もしくはすぐ隣に付属の建物が存在することが両古図より読み取れる。しかし当時の生活面は埋甕の口縁部の標高と同じ程度であり、その上に45～50cm程度の江戸末期の瓦を含む整地層が存在しその上に中家住宅が建っているのである。この埋甕が確実に便所甕として使用されていたとすると、中家住宅創建以前に埋設されたものとも考えられる。

③については、リング状土壙は従来「樹木抜去痕」であるとか「土壙墓」であると言われ正確にその性格は位置付けられておらず、今後の調査成果に期待するものである。しかし、今回A－1区で検出したリング状土壙は前記の性格には当てはまらず埋桶であることが判明した。それはSK09においては検出した平面形を詳細に観察すると内環部がほぼ真円に近い形状で検出したこと、また慎重に掘下げて行くと厚さ2～3mm程度の薄い板状の木片が僅かではあるが残存していた。しかし部分的にしか残存していないこととかなり腐朽しているため詳細な桶の形状・組成等は確認することは出来ない。桶であったであろう部分を推定して復元してみると、検出面での口径1.40m、底部径1.25m、深さ0.25mとなる。SK10はSK09のすぐ隣で並んで検出した。平面形、断面形共にSK09とかなり酷似しており、同時期に埋設されたものと思われる。しかしSK10からは木片は出土していない。これは恐らく完全に朽ちてしまったかもしくは抜き取ってしまったかであろう。桶を推定復元すると検出面での口径1.39m、底部径1.28m、残存高0.30mである。また、前章では埋桶が廃絶した後に、瓦の廃棄坑へと転換した様であると推測したが、そうでなく元々瓦を埋納するために埋められた桶である、という可能性も考えられる。

この2つの他にＳＫ08・24・28、ＳＰ22もリング状土壙の形態をとるが、いずれもＳＫ09・10と比べると規模はかなり小さく、断面形もかなり異なったものになっており詳細は不明と言わざるを得ない。

ＳＫ09・10を検出した地点を古図（年代未詳）と照らし合わせて見ると、門長屋が存在していた場所もしくはそれに隣接した場所になる。しかし埋桶が機能していた時期はおおざっぱに明治末期以前としか言えずまた、用途も不明であり門長屋と関係付けることはいちがいに出来ない。

④について今回出土した遺物を見てみると若干古代、中世の遺物も出土しているがほとんどが近世の陶磁器と瓦であった。これは中家住宅建築の際に大幅な土地造成を行って削平されたものと思われる。古代・中世の遺物を除けば一番遡り得るものは16世紀末頃に比定される備前の壺である。中家住宅が成立したのがその建設様式から桃山期から江戸期にかけての時期と推測されることを考えるとこの考古学的成果と一致することになり、中家住宅の年代観を裏付けるものである。また出土遺物が大きく分けて半世紀毎の4つの時期に区分することができ、その位のペースで増改築あるいは廃絶していたものと推測できる。

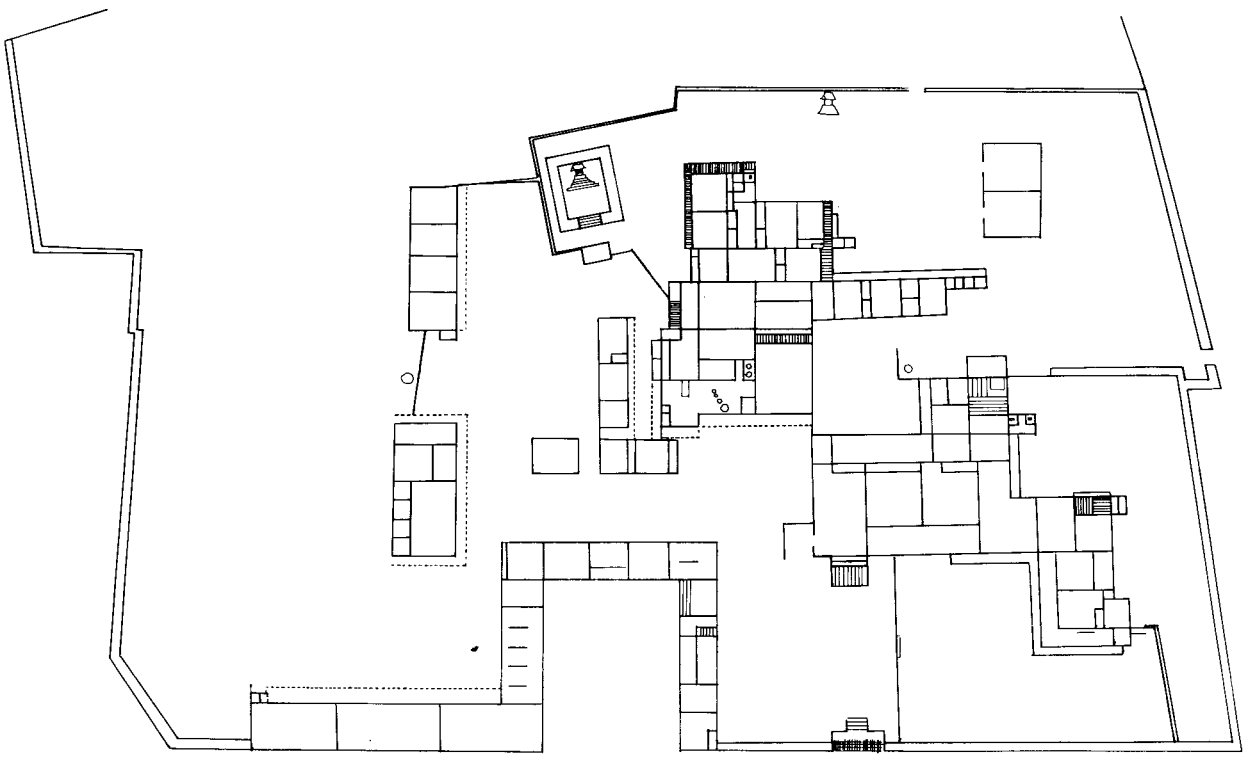
以上が今回の調査成果のまとめである。中家住宅の起源を建築様式・文献にある様に、16世紀末から17世紀初めに求め得る成果を挙げることが出来た。しかし一つ疑問に残るのが現在の生活面と当時の生活面である。若干の削平があるとしても比高差が60㎝以上あるのである。そして地山の上層では19世紀以降に比定される瓦が大量に出土しているのである。

此の事が何を意味しているのか推測するに、中家住宅建築当時の地山のうえに60㎝以上の整地作業を行って建築もしくは改築・移築したものと思われ、その後母屋周辺地域を解体等を行った際に廃棄物等を投棄したものと考えられる。またあるいは、中家住宅母屋を19世紀以降に土地の造成作業を行い、引き家等の建築工事が行われたとも考えられる。

また中家文書から考察を加えてみると、中家には15世紀初頭から近世にかけて約千点にも及ぶ田・畠・屋敷地・山林などの売券が残されており、16世紀には熊取荘内で優位の地位を占めており、かなりの勢力をもっていたことがわかっているが、天正12（1584）年12月25日付から天正17年5月24日付までの間約4年半の期間の売券が存在しない。後世にその部分が散逸したことは考えられず、その間中家の活動は停滞していたと考えられる。これは天正13年の秀吉の根来寺攻めの際に中家ゆかりの成真院は破却されたと考えられている⑦。このことから考えられるのは天正13年の秀吉の根来寺攻めのおり、中家を含む和泉36郷土として根来の泉南地方守護隊として出兵している事から、その時に中家住宅を含む熊取の主な建物が破壊・消失したとも考えられ、それ以降に中家住宅が再建されたことは十分に考えられる。

いずれにしても中家住宅の真下を調査しなければはっきりしたことは言えずこれは今後の課題としたい。

参 考 資 料



第15図．中家住宅旧平面図（年代未詳）

註

① 『重要文化財中家住宅修理工事報告書』 重要文化財中家住宅修理委員会 1968. 12

② 『熊取町埋蔵文化財報告書第１集』 熊取町教育委員会 1986. 3

③ 『熊取町埋蔵文化財報告書第１・２・４・８・９・11・13・15・16・17・19・20・22・23集』
熊取町教育委員会 1986. 3～1995. 3

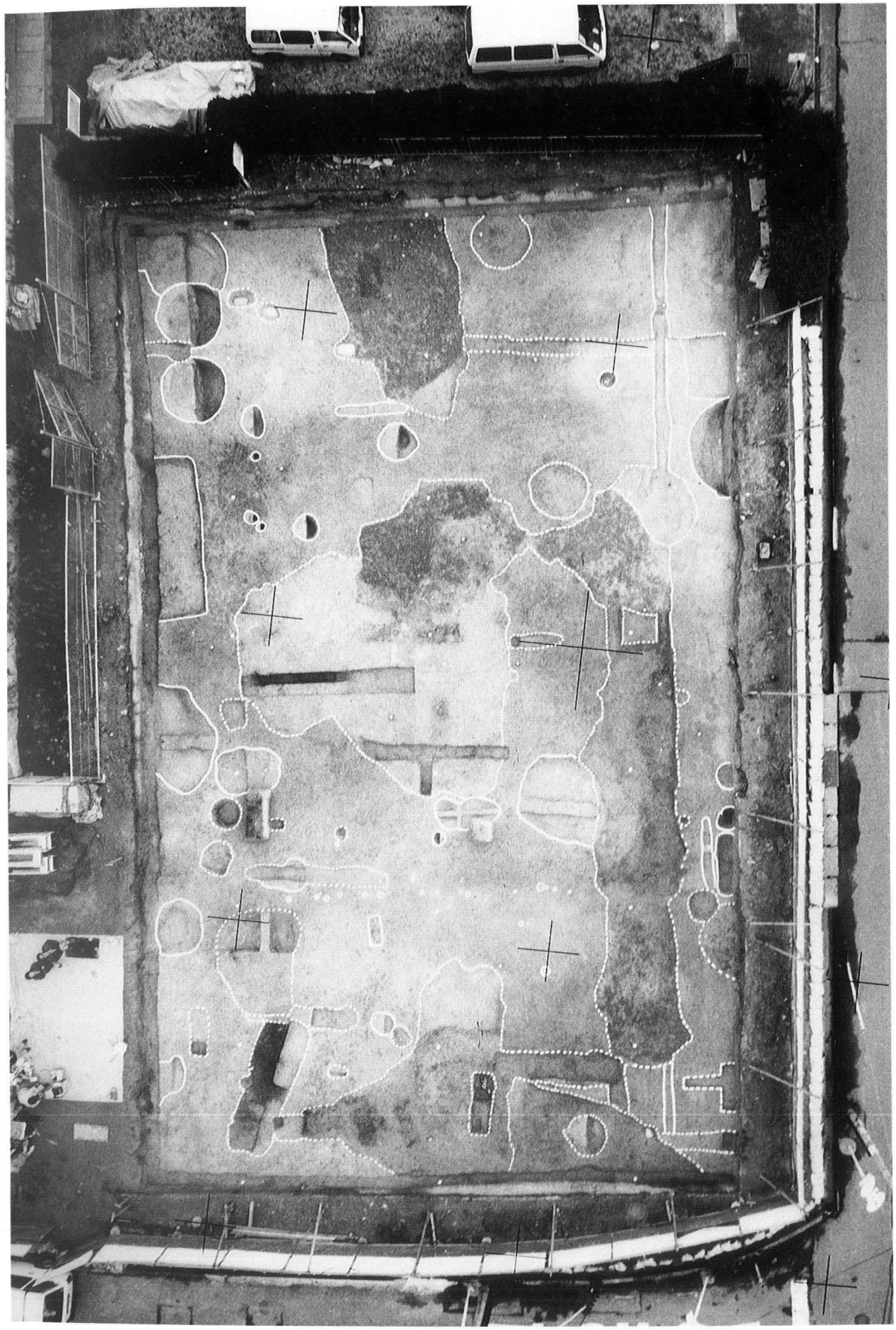
④ 1990年に熊取駅前整備事業として行われた調査であるが未報告。96年度刊行予定。

⑤ 『熊取町埋蔵文化財報告書第21集』 熊取町教育委員会 1994. 3

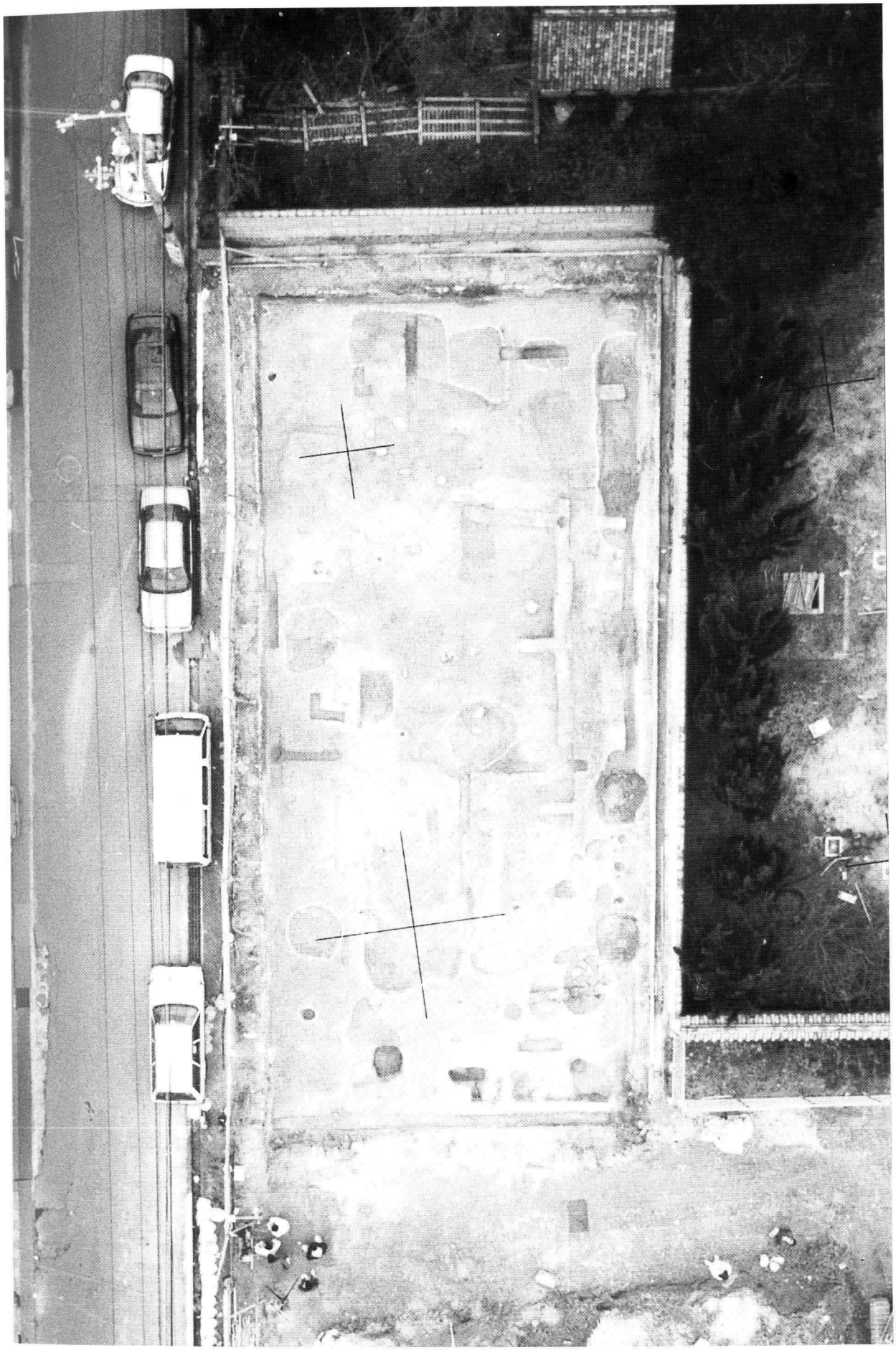
⑥ 『大阪府の民家』大阪府文化財調査報告書 第十輯 大阪府教育委員会 1959. 3

⑦ 三浦圭一「羽柴秀吉の紀州攻撃と大坂」『大坂の歴史』第六号 1982. 3

図　　版



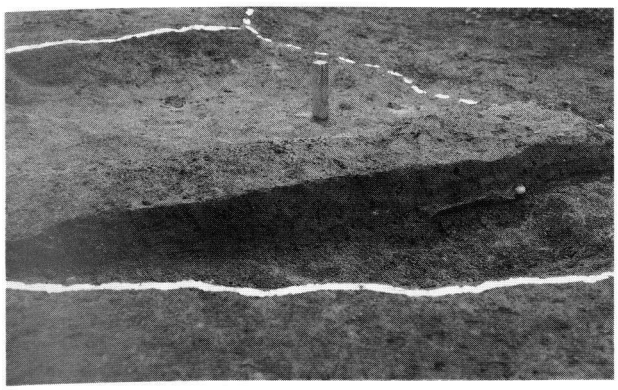
図版第1　A—1区全景



図版第2　A—2区全景

A－1区南壁

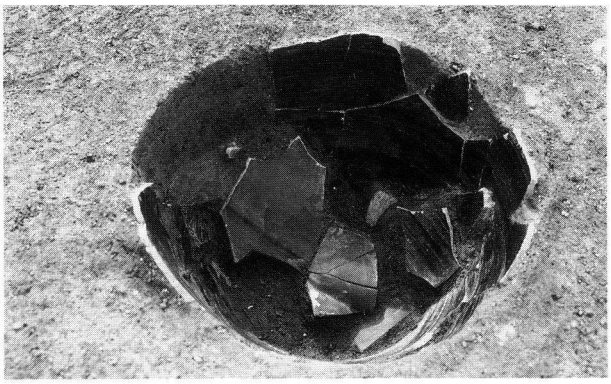
A－2区東壁



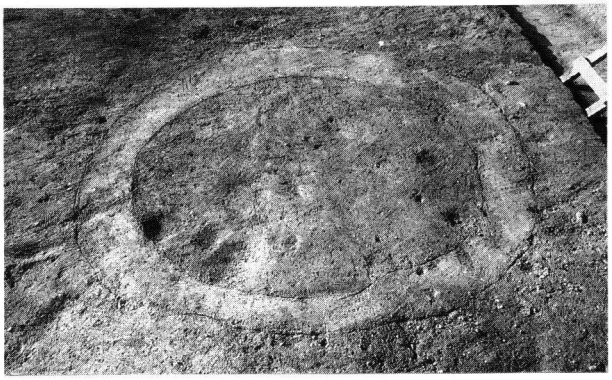
SK05

SK07

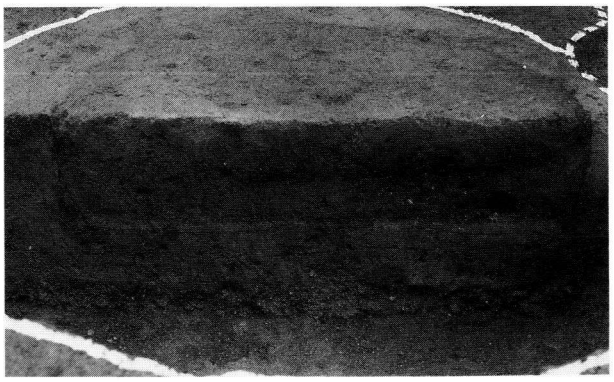
SK08



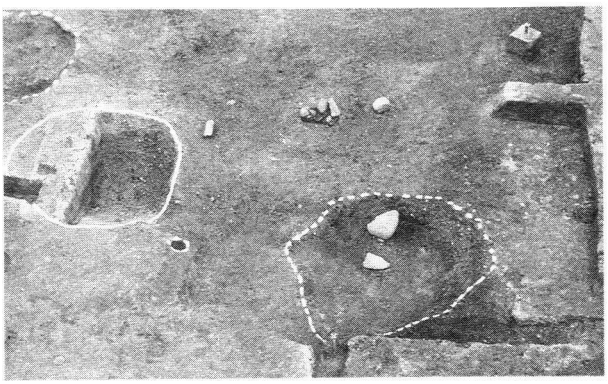
SU01

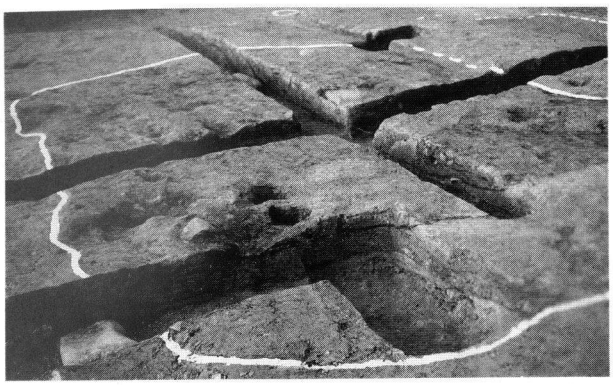


SK09

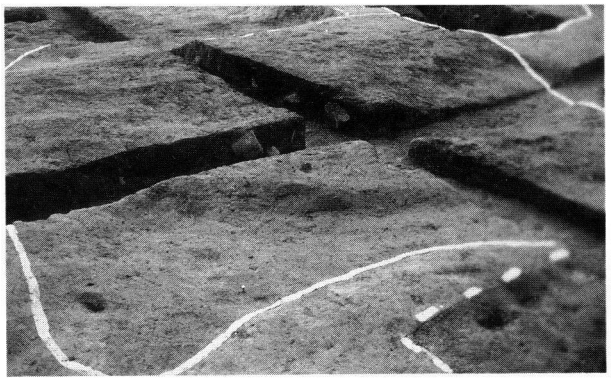


SK10





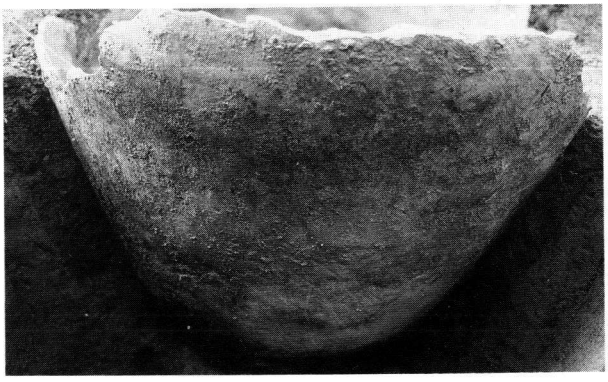
SX21



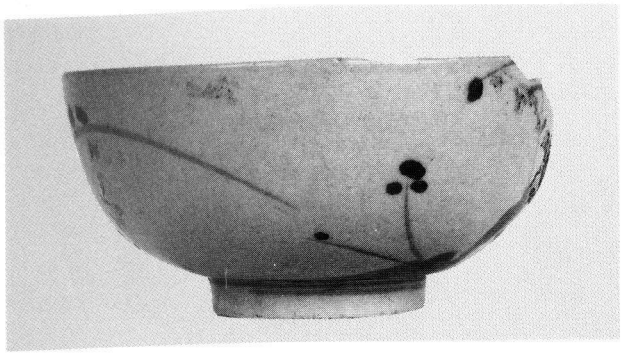
SX22

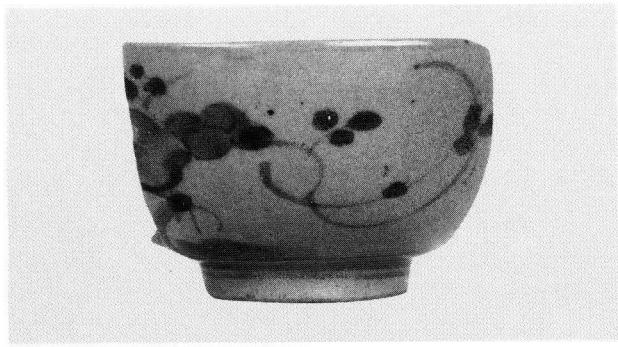
SK22

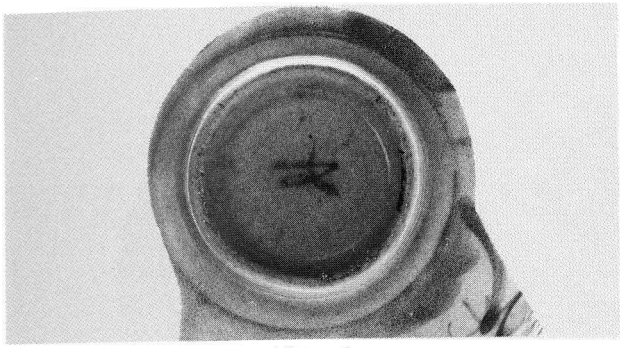
SK27



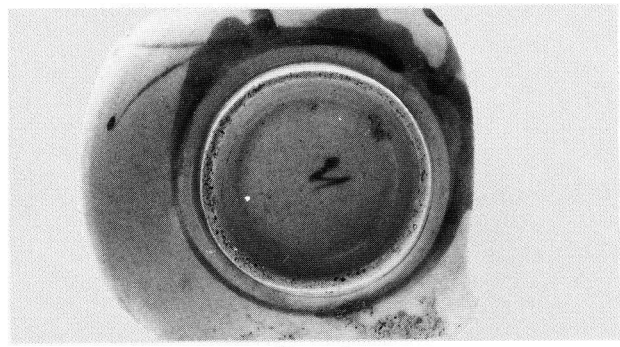
SU02





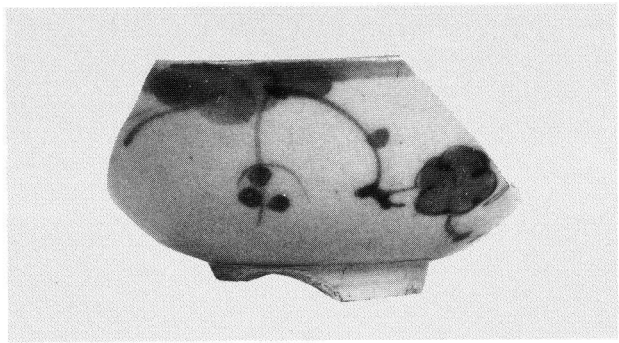


13－1



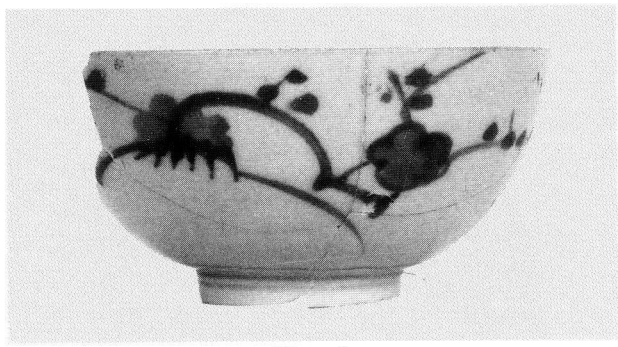
13－2

13－3

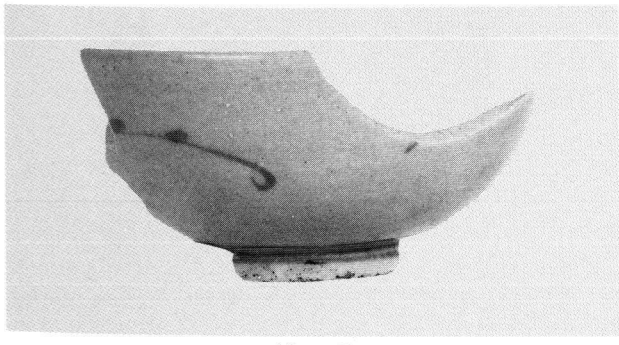


13－4

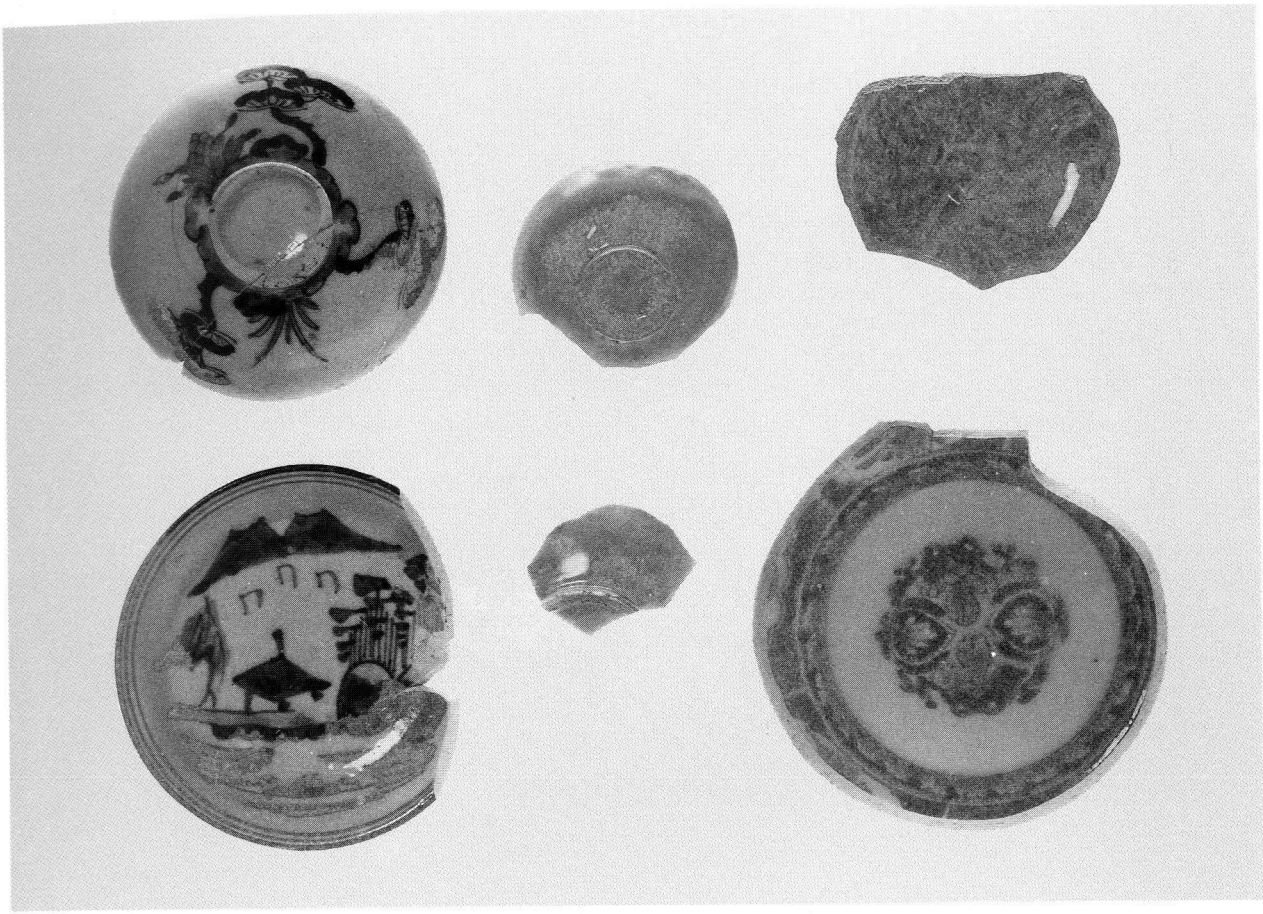
13－5



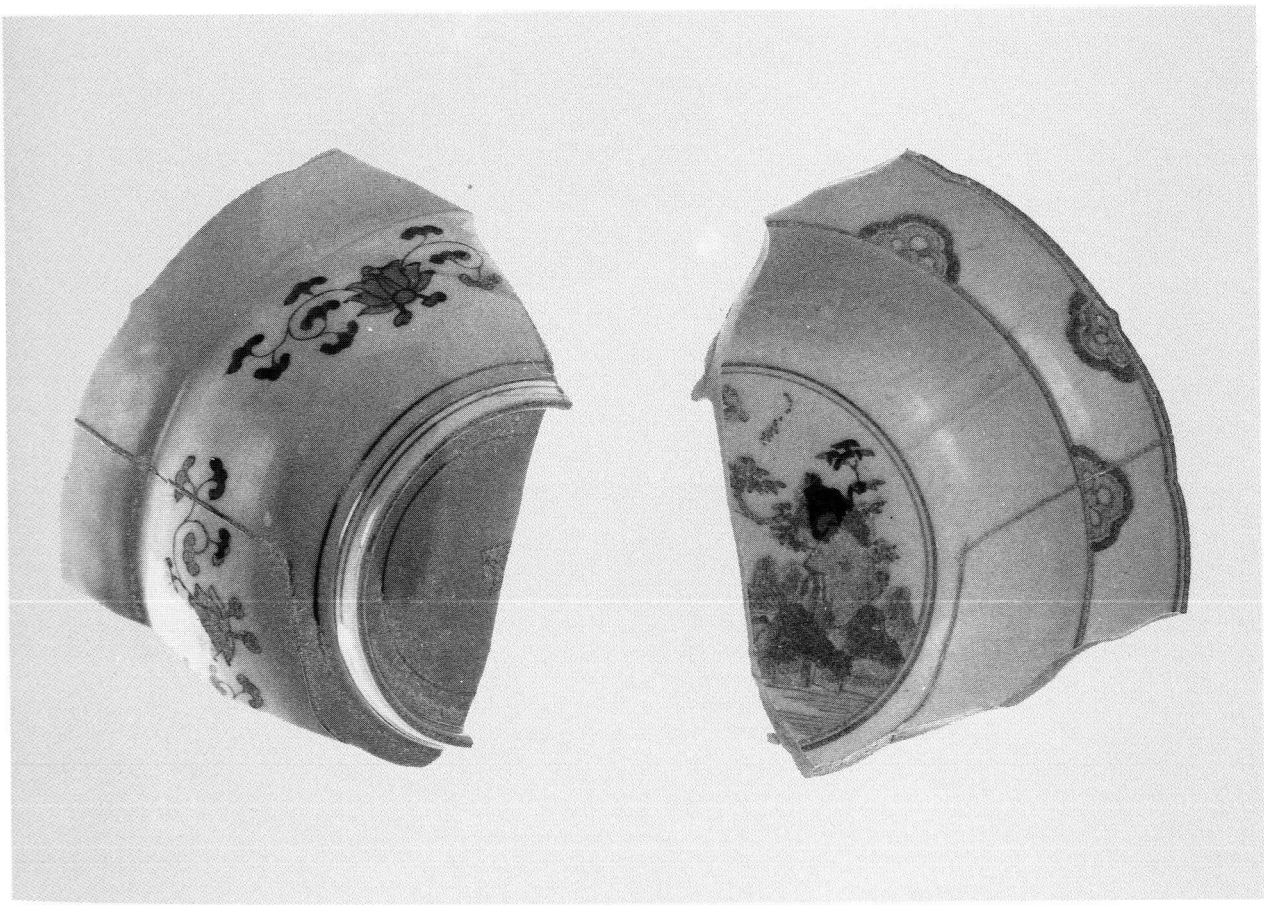
13－6



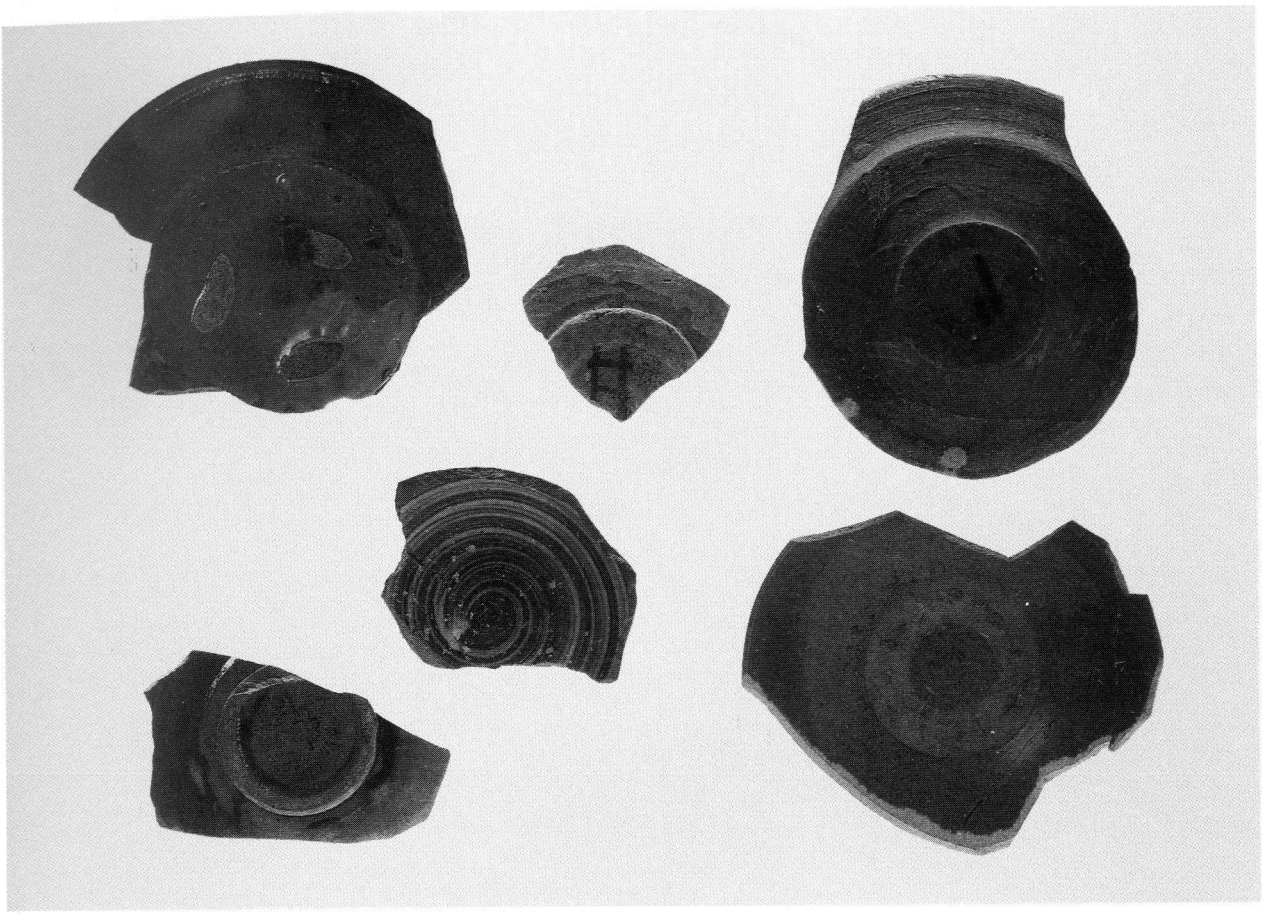
13－7



13－8～13

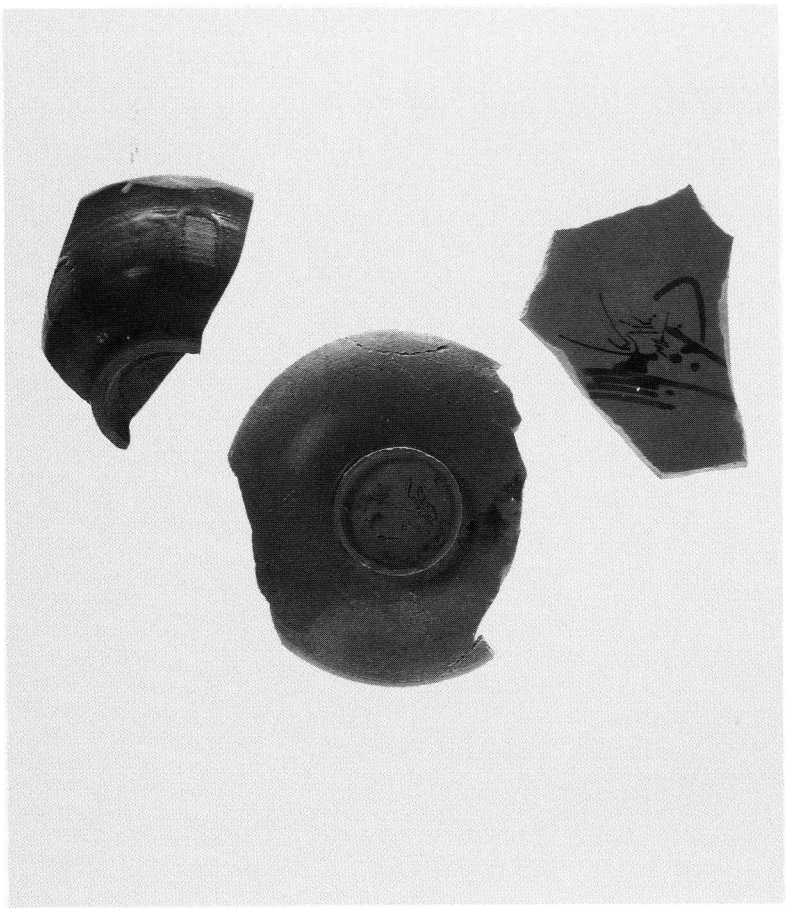


13－14

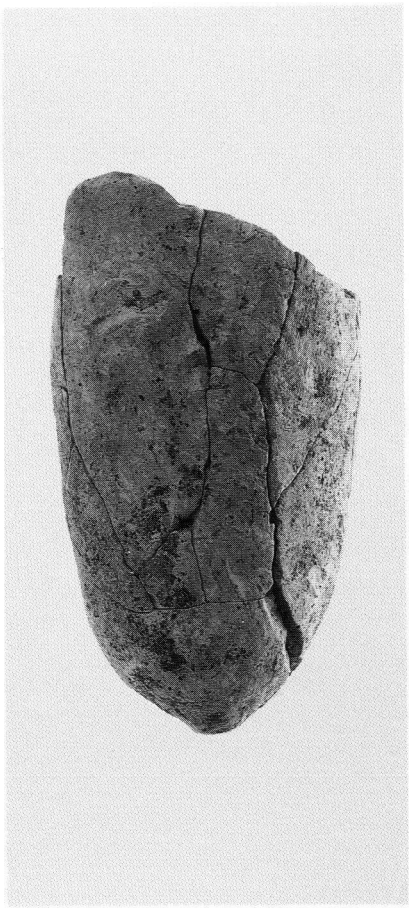


13 — 15 ～ 20

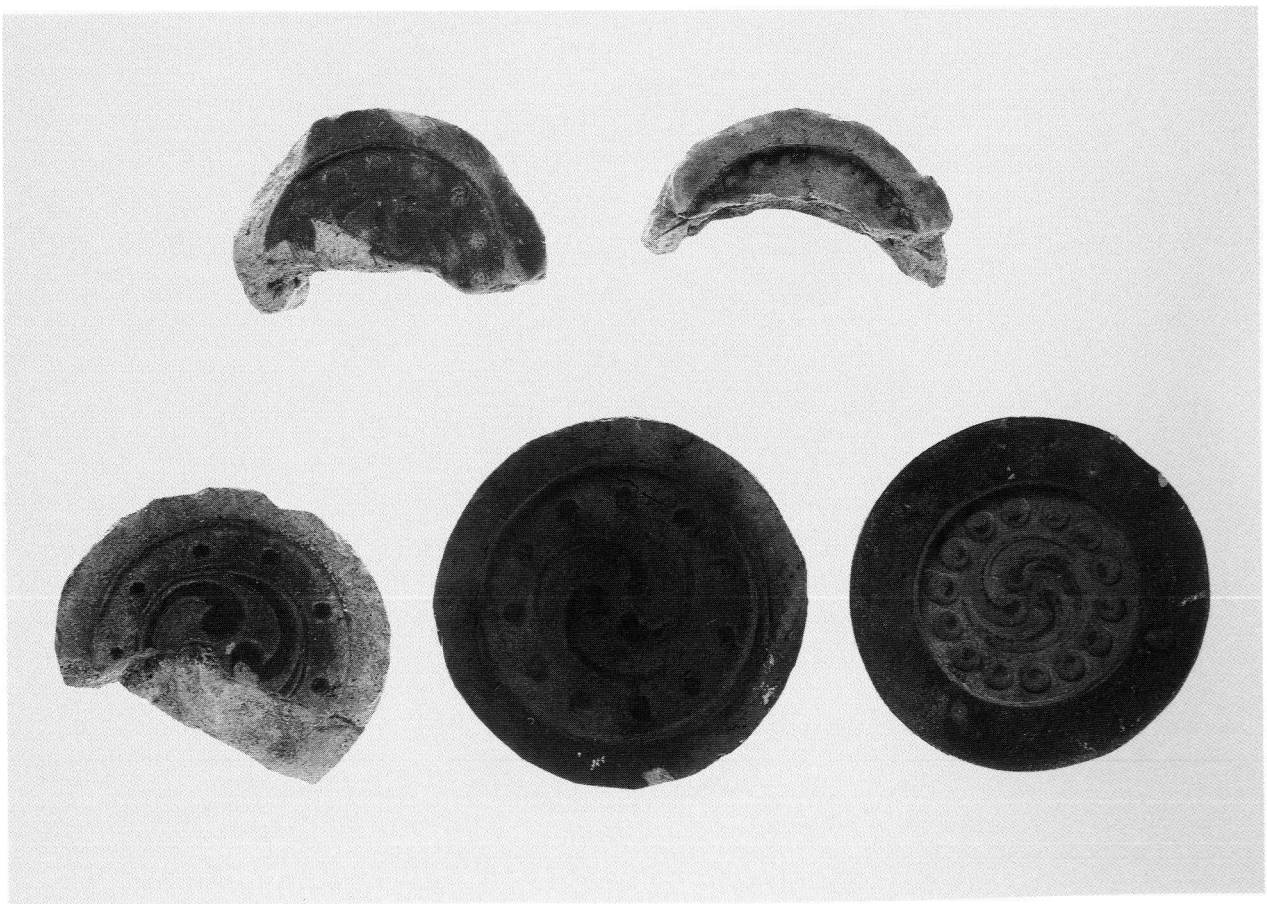
13 — 21 ～ 23



13 — 24 〜26



13 — 27



14 — 1 〜5

14－6

14－7

報告書抄録

ふりがな	なかけじゅうたくはっくつちょうさがいよう
書名	中家住宅発掘調査概要
副書名	中家住宅94－1区
巻次	Ⅱ
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第25集
編著者名	永井 仁
編集機関	熊取町教育委員会
所在地	〒590-04 大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地 TEL(0724)52-1001
発行年月日	1996年 3月 29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかけじゅうたく 中家住宅	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざ 熊取町大字 ごもん 五門26-1 他16筆	27361	2	34° 23′ 51″	135° 21′ 04″	試掘調査 19940918～ 19940927 本調査 19941108～ 19950116	822	歴史文化施設整備事業における郷土資料館建設工事及び重要文化財中家住宅防火施設整備事業における消火設備工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中家住宅	建物跡	江戸時代	埋桶3基 建物跡2基 井戸1基、埋甕2基	須恵器、土師器、瓦器 東播系須恵質土器 備前壺、唐津・皿 丹波壺、瀬戸美濃碗 肥前系染付碗・皿・鉢 軒丸瓦・軒平瓦	中家住宅建築当時と同時期に比定される建物跡と推定される遺構を2基検出した

熊取町埋蔵文化財調査報告　第25集
中家住宅発掘調査概要報告書・Ⅱ
平成８年３月　発行
発行・編集　熊取町教育委員会
貝塚市北町20－18
摂 河 泉 文 庫